

本篇

無礙光 (用大)

報身無礙の光明は 十方摂化の聖意なる 本願不思議の力にて 衆生を解脱し自由とす。

神聖無上の命令は 道德律の光にて 正義は選善捨惡にて 至善に向ひて進ましむ。

恩寵は三縁の慈悲をもて 聖子等の靈を育みます。

斯の三徳の靈力にて 便はち仏道成ぜしむ。

如來の三徳

如來が衆生に対する終局の目的は、一切衆生の道徳的人格を、父の完き如くに衆生の心靈を開発し、靈化して、仏教に謂はゆる万徳円満なる仏に為さん事であり。如來は一切衆生を子とし、完全円満なる靈的人格を成就せしむることは父たる聖意である。一切衆生の心靈を養成するに家庭に於ける父母の如し。

衆生に対する如來の靈徳を三徳とす。一、神聖。二、正義。三、恩寵是なり。
神聖と正義とは子に対する嚴肅なる父の如し、恩寵は慈愛に富める母の如し。

一、神 聖

如來が衆生の道徳的行為を照鑑し給ふ智慧なり。神聖と正義としての如來は嚴肅なる慈父の如くに

衆生よりは感じらる。神聖と正義は道德律の根本にて、神聖は行為の光明にて善惡邪正を如実に照見の鑑なり。如来神聖は如実に衆生の三業を照見し給ふ明鏡なり。故に我等神聖なる如来照見の鑑かみに向ふ時は自ら正しくするに至る。法華經に我常に衆生の行道と不行道とを知りて度すべき所に随つて度すとは是なり。

如来の神聖と衆生の正見

衆生の行道を照鑑し給ふ如来の智光は太陽の光の如くに外界より照すに非ず。絶対なる根底より人の直覚的正見（良心）として囁き来る如来の命令なり。

真理犯す可からざる道德律の光明なる如来の神聖が衆生の正見と為りて自己の行為を返照す。我等が正見に対する如来の神聖は道德律の立法者にして亦司法者なり。如来の神聖が人の正見として世の所謂良心と現じて、自己の行為を判断し邪正善惡を明かに照見して惡を排して善に就くべきやう命令す。

神聖と天命の性

如来は道德律の根底にして、世に善の栄え悪の亡びる性の自然に有するは、是宇宙の大法に善は理に叶ひ悪は称かたはざるが故なり。若し又儒教を仮りて云はゞ、人には天命の性として悪を避け善に就くべき性を具して居る。即ち天の命之を性と云ふ性に率よふ之を道と云ふと。人の天命の性は正善なること水の卑きに流るゝ如くなるを、私欲が本性に反して悪を作すと云ふ如く、とまれ仏教に謂ゆる、人の心の本性は仏性にて、自性清浄なり。唯煩惱に覆はるる為に本性に反して不道德を為す。

如来の神聖は衆生の本性の清浄無垢の意見なる正見となり、之を顕はせば即ち成仏なり。道德標準の神聖の光明は一切衆生を至善の神靈界に帰趣さすべき航海の燈台なり。人の意志は世の八風の為に動かされ私欲に偏かたよりて正当を失ひ易し。故に人生の航路を進むに、神聖なる光明の下に自己の正見を以て之に順ふべし。然る時は有終の美なる光明の国に達すべし。正見は鑑かたみの如く公平無私なり。また神聖は道德秩序を照す日光にて、正見は如実に行為を見る目の如し。道德律の根本は法性ほつしよ本然の理法にして、諸仏も之を造作せず、千聖も之を改めず、是本然の常法なれば、諸仏出世して此を衆生の為に開示し給ふのみ。

道德律の根本は神聖

如来は神聖にして道德律の根本なり。通仏教にては有らゆる道德を束ねて持戒を以て道德の根本とす。戒は止惡作善の体なり。仏陀は大乗律に、道德律の根本として、梵網戒を説き給ふた。道德律は神聖にして犯す可からず。これ本性本然の理法なれば、仏出世し給ふとも作善止惡の道德の法体は更に造りし物にあらず。

故に釈迦自ら説き給はず、本仏盧舎那之を誦し給ふを釈迦は百千万億の仏陀と共に道德律を聴き給うた。

梵網經に「我今盧舎那方に蓮華台に坐す。周匝せる千華の上に亦各千の釈迦を現す。一華に百億國あり一國に一釈迦在ます。各々菩提樹下に坐して一時に仏道を成ず。是の千と百億とは盧舎那を本身とす。千と百億との釈迦が各々微塵の衆を授けて俱に我所に來至して我仏戒を誦するを聴いて甘露の門即ち開く。是時に千と百億の釈迦還つて本道場に至つて各我本師の戒たる十重四十八を誦す。戒は明なる日月の如く亦瓔珞珠の如し一切の菩薩衆是に由て正覺を成ず。是盧舎那誦し給ふ。我も亦是の如く誦す。汝新學の菩薩頂戴して戒を受持せよ。是の戒を誦し已つて轉じて諸の衆生に授くべし。諦かに聴け是正しく仏法中の戒藏波羅提木叉を誦すべし。大衆心に諦かに信ぜよ。汝は是當成の仏、我

は是已成いじょうの仏なりと。常に是の如きの信を作さば戒品已に具足す。一切有心の者は皆応に仏戒を受くべし。衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る。位大覺に同じ已らば真に是れ諸仏の子なり』と。

是れ通仏教にて道德の根本なる波羅提木叉（戒）は法性本然の理として千聖も易へず、万仏も改むる能はざる底の常法である故に、諸仏の本仏なる盧舎那が有らゆる分身の釈迦を徵集して自ら道德律は斯くなりと誦し給ふて聴かしめ、此本然の常法たる道德法を以て一切に則らしむべき命令をしたまふた。此戒法は是一切衆生の仏性を開きて、天命の性たる本心と法界ほうがい等流とうりゅうの道德律とは合致すべき性徳なり。

本衆生には仏性なる道德心の本性を伏藏す。之を開発して道德心を活動させるに至る。此開發する契機を受戒の作法とす。此作法にて戒体が實に發得はつとくする時は、道德心の光を以て、身口意の作業法性の理に合ふ行為を為すに至る。戒を發得すとは、喻へば燭に火を点ずる如く一度び燭に火を点ずる時は燈る如く、心意に燈りつゝある戒光は自己三業を照して如實の行為を為すを得。

宗教的に云はば、如来の聖意は神聖にして、神聖の光明にて衆生の心靈開く時は、正知見しょうちけんの眼を開き、道德律を照す光明の中には、自然と聖意に稱なぞはざる邪と惡を去り聖意に稱ふ正と善とに進むべき

やう、如来の命令が正見に囁き来る。又一切の邪と悪は闇黒にして正と善とは光明なれば、正しく神聖なる光明に向つて行く人は自づと自己の邪悪を排して如来の神聖なる正善に進むべくなりぬ。

神聖は衆生の道德秩序を為す如来の聖意にて人の正見を照らす光明なり。

二、正 義

神聖としては如来が道德秩序の光明にして、正義としては邪悪を排して正善に進ましむる原動力たり。太陽が中心となりて惑星を正しく軌道の下に運行せしむる動力を与ふる如く、如来は一切衆生に對して道德秩序の中に正しく力行すべき靈力を与へ給ふ、即ち正義なり。人の方より云はば、神聖が正見を明す眼とすれば、正義は衆生を正道に行はしむる足なり。

正義は邪悪を排して正善に進むべき性なり。世には悪は嫌忌せられ善は称揚せらるゝ性を有つて居る。そは邪悪は闇黒にして正善は光明なり。闇黒は如何に深厚なるも、光明には消滅せらるゝ性なり。すべての邪悪は正義の光明の欠けたる処に発する魔物なり。正義は真善微妙に向つて向上する性

を持つて居る。

如來が眞善清淨の国土を建設するには排惡取善の正義を以てし給へり。弥陀の四十八願を以て淨土を建設すとは是なり。弥陀は淨土を設立するに捨惡選善の本願（聖意）を以て就し給へり。曰く二百十億の世界の中より国土の龜を捨て妙を選び、人天の惡を排し善を取りて、有らゆる邪惡龜穢を捨て有らゆる正善微妙を選取して、眞善微妙の淨土を建て給へり。捨惡選善は是正義なり。善惡混淆正邪雜濫の処には清淨土は立ち難し。

故に聖意に叶はざる邪惡不淨は悉く光明の中には消滅す。正義の光明は諦に邪惡を排して正善を選取する性能を有す。この光明は喩へば日光に病毒の黴菌を撲殺する力ありて或生物には活力を与ふる如く、弥陀正義の光明は衆生及び社会に害毒を及ぼす邪惡の黴菌を消滅して正善に活氣を与ふる勢力あり。

正義は衆生の精神界に在りては一切邪惡雜毒に対して奮闘する勢力なり。社会に在りては社会を紊亂し、汚濁醜猥また淫風弊習の毒素を撲殺する能力なり。弥陀は正義の光明を以て、一切衆生の靈に活き正善に力行し一切惡魔との健闘に大なる勢力を与へ給ふ。

釈尊が諸の外道悪魔等に正法を宣揚して諸の邪道を摧伏す。即ち法鼓を扣き法螺を吹き法剣を執り法幢を建て法雷を震はし法電を曜かし法施を演ぶ。常に法音を以て諸の世間を覺せしむ。光明普ねく照らして、一切世界六種に震動し、総じて魔界を摂して魔の宮殿を動かす。衆魔懼怖して帰伏せざる無し。邪網を摑裂して諸見を消滅し諸の塵勞を散じ諸の欲慳を壞す。法城を嚴護して法門を開闡す。垢汚を洗濯すること顯明清白にして、光く仏法を融めて正化を宣流すと。是正義の幢を建て、諸の邪道を摧きしなり。

正義は如来の聖意が行爲を現はす力なり。正義は千万人と雖も我行かんと云ふ如き勇氣の加はる力なり。弥陀の正義は菩薩の意志として正道に立つて最善の努力を爲す。

經に聖意の加りたる菩薩の意志を説いて「因力、縁力、意力、願力、方便の力、常力、善力、定力、多聞の力、施、戒、忍辱、精進、禪定智慧の力、正念、正觀、諸通明の力、如法に諸の衆生を調伏する力、是の如き等の力一切具足せり」と。斯の如きの力は悉く如来の聖意を意として努力する処の正義の力なり。

三、恩 寵

如来が一切衆生を光明の中に摂めて心靈を開発し正善に同化したまふ大慈悲即ちこれ恩寵なり。神聖と正義とは嚴父に例すべく恩寵は慈母の愛に比すべし。喻へば世間に父母に依て子は養育せらるゝも、初めは母の懷に於て育てられ又家庭教養にも母に依て養はる、而して靈の眼は開け、行為の足も發達するに至る。神聖に合ふ正見の眼、正義の足も發達するに至る。本は恩寵の靈育を被むる故なり。

如来の恩寵と衆生の信念との關係に就て、聖善導は三縁の深密なる因縁あることを明し給へり。三縁とは一、親縁。二、近縁きん縁。三、増上縁。是なり。此三縁は如来が十方一切衆生の父母として一切の子等を靈育變化し給ふ助成の強きことを示したるなり。如来は一切衆生の眞実の父母なれば無条件の恩寵を以て諸の衆生を摂取し靈化し給ふ。故に如来の大慈悲の光明は十方世界に徧照して如何なる時いかなる処に於ても充滿せり。但し衆生の信念する処に於て摂化の益を被る。喻へば太陽が光熱化を

以て万物を照し化育する如くに如来は一切衆生の心靈を養育したまふ。此の恩寵を被むるべき衆生の方は信念なり。

一、親縁しんえんとは如来を信念する心と如来の恩寵との最親密なること、譬へば子に乳房ちちを哺まませる慈母よりも甚だし。されば聖善導が、親縁とは衆生が念を起して口に聖名を称ふれば仏は之を聞き給ひ、身に敬礼し奉れば仏は之を見給ひ、意に仏を念ずれば仏は之を知り給ひ、また衆生が仏を憶念し奉れば仏もまた衆生を憶念し給ふ。彼此ひたしの三業さんごう相捨離せず。故に親縁と名づく。今謂はゆる親縁とは如来の大慈悲心と衆生が如来を愛樂あいらくする心の内容が融合して、親愛の情が深濃となりて、而して従来の唯肉のみを愛して居し情が転じて、最高最美の最靈徳の如来を親愛して、益々愛念が進むに随つて自己も如来の靈美の心に同化せられて、靈感転た極りなくして、慈悲心にも富むに至る。如来を深く愛念し奉るが故に愛化す。之を親縁と名づく。

二、近縁きんえん。近縁とは如来と衆生の信念の心とは最も近接し不可離の因縁あるを云ふ。如何にとなれば、実は如来は肉眼の対象に非ずして直観すべき靈体である故に、若し全く見仏するにおよんでは、自己の靈なる能觀の心と、所觀の靈相とは一体である。能觀の心も実は法界周徧にて、所見の相好身

も法界周徧なり。故に其の接近不可割の因縁は毫ちりの隙すきもなし。されば聖善導が、衆生仏を見んと欲すれば仏目前に現れ給ふ、近縁と名づく。能見心と所見の靈相との関係は何物も其隙に入りて障害する能はず。亦いかに広大の仏身も我等が心には観じ得らる。

或禪僧曰く本来弥陀我胸方寸に在り何ぞ外十萬億の彼方に求めんと詰たじるあり。予曰く師が心は胸三寸と云ふけれども、若し全く三寸の外は自己の外ならば、今汝が室内の物を見る、是胸三寸の中なるか將た外なり哉、若し心三寸ならば室内の物を知る由なし。今我弥陀と我等念仏者の心的關係は、全く弥陀十萬億土に在りて而して我心内、我心内に在りて全く十萬億土なり。觀經に弥陀尊を説くに、身の丈六十萬億那由多な恒河沙由旬じゆんと。斯の如きの大身を觀せんには、十萬億土の此方こなたに在りて瞻仰せんやうするが適當の位置なり。されば「念仏者の心本尊は六十萬、十萬億の奥行の堂」。若し能く此理を會得えとくせば念仏者と如来との接近不可離の真理なること疑はざらんと。

三、増上縁かうじようえん。増上縁とは念仏心と如来の恩寵との因縁は如来には非常に強き助成の力ある義なり。故に衆生に如何に業障ごうじやう罪障深重なりとも全く如来の恩寵の前には消滅せざるを得ぬ。喩へば衆生の業障罪障煩惱等は闇黒なり。闇黒は如何に深重なるも光明には照破せらる。又衆生は赤子の如く如来の

恩寵は慈母の如し。子の成長するは全く母の力なり。自己は無力にして彼方は大なる増上の力を以て縁成す。衆生には汚と悩と煩と悶と罪とがいかなる人も本来具してゐる。煩惱の垢質あるが故に凡夫は靈徳円満なる仏が現前せぬ。如来は衆生の母として、衆生の取り除くべき垢質を脱却して仏の子としての靈徳を長養し給ふ増上の力を有す。

衆生の六根は常に色声香味の五塵の為に汚さる恰も身体に垢つく如く。垢を去るに清き水を以て洗滌する如くに、如来は清淨光を以て人の六根を清淨にす。

凡夫の感情には憂、悲、苦、悩を有つて居る、之を煩惱と云ふ。世の人は愚かにしておもへらく、人は唯物質に於て満足なれば心は常に安穩なりと。然らば世に物質に何の不足なきに拘らず精神常に憂悲恐怖の断えざる者あり。眞の平和と満足とは実は精神にあり。若し弥陀の歡喜光に充滿さるゝ生活に入る時は、心寛く体肝たいたかにして、心に法喜の悦び極りなきを感じるに至らん。

又人の智力は闇く本来無明なり。生の從來する処死の趣向する処を知らず、明日己が身に如何なる祥不祥あるを先知するの明なし。故に人は惑ひ易し。吉凶禍福に対しても或は宿命なりと思ひ又は方位又は年廻り等の迷信に陥り易し。皆是無明の致す処。若し如来の智慧光を被りて知見開く時は、物

に迷はず、すべて如来に一任し、人生の自覚光明中に有終の美を信じ、如来の實在を信じ、又他を教へて宣伝するに至る。

人の意志は薄弱にしていかに豪傑も肉欲我欲の己には克ち難し。此の弱き我を復活せしめて真善美の理想界に向つて向上の一路に進ましむるは如来の不断光なり。

斯の如く本来人間は染汚、無知罪惡、苦悩の弱点を本来具しておる。是即ち宗教の要ある所以なり。されば如来は清淨智慧不断歎喜の光明を以て、人の弱点垢質を脱却して人の精神を淨化し、知見を開き、正善に化し正善と靈福に善化する処の増上縁なり。

如来は衆生を子として凡ての人間的の弱点を脱却して仏の子として靈徳を育みて而して靈的に健全にし、父の完き如くに完からしむる増上の縁なり。

佛陀の三徳

弥陀は法界最上に存在する中心本尊、十方一切諸仏の本仏、例へば太陽の光明赫々として諸の星宿

に反映せる如く、弥陀の万徳円満なる光明は一切諸仏に顕現す。釈迦天尊の如来の徳を行じたまふとは是なり。弥陀の神聖正義の光が人仏釈尊の身に現じたるに外ならず。弥陀は太陽にして釈尊は淨満月の如し。弥陀の三徳に充滿せる釈尊なれば、神聖と正義とを以て靈格の威嚴威神光明極りなし。実に神聖にして犯す可からざる威徳を備へたまふ。恩寵としては太陽の熱線の如く、大慈悲のミオヤとして衆生を悉く一子の仁慈を以て慈しみ心靈を育みて完きに向上せしめたまふ。

天に在りては無量光、地に出ては釈迦、釈尊の人格の円満なるは即ち弥陀の靈徳。若し釈迦を宇宙大に広くすれば弥陀なり。弥陀を人格に現すなれば釈迦なり。天地処を異にし大小顕現を異にするも同じく大靈徳。如来徳なり。故に如来徳を行ず。如来の徳とは太陽の万物化育を徳とする如く、弥陀釈迦は一切衆生の心靈を常恒に摂化し靈育したまふ。

神靈正義恩寵

神聖は如来が衆生の三業の行為を照鑑し給ふ智慧である。如来が神聖なる智慧の眼を以て、常に衆

生の心と業とを明かに照鑑し給ふことを諦かに信ずる時は、喩へば厳格なる父の前に居る小児の如くに、我等自然と身も心も正しくなる。如来の神聖が人の道徳心の本たる正知見正見である。正見とは如来の聖意にかなふ了見にて見込が正しいことである。正見から出て来る思惟と言語と身に為すことは正しくなる。

道德法の根本は釈尊が自己の意見に依つて定めたるに非ず。本然法爾の理たることを示す為に、釈尊が菩提樹下に於て正覚を成ずると、直ちに三昧に入つて、遮那天尊の許に詣られた。遮天尊とは無量光仏の異名なり。本仏が、道德法の神聖なるを顕すは梵網經に示せり。此經は道德律を説給ひしもの、宇宙全体を一体とし蓮華藏界の蓮華台に本仏盧遮那尊が坐し給ひ、千と百億との釈迦仏が各蓮華に坐して本仏を圍繞し給ふ時、道德の根本波羅提木叉を誦したまふ。戒体とは即ち道德の法体を代表したる名なり。千百億釈迦も本仏の戒を誦し給ふを聞く。仏法中の戒藏、波羅提木叉を誦し給ふ。

無量の諸仏が本仏の道德法の根本を誦するを聞くと云ひ、本仏も尙説（ ）して誦すと云ふは、全体道德の根本は天然の法爾の理にして一切諸仏も自ら定め自ら制定したるに非ず、神聖を顕はす為に全宇宙を道場とし、一切諸仏を眷屬として誦し給ふ。道德律戒は日月の如し、亦璠瑤珠の如く、日月

の瞻仰せんごうせざる者無きが如し。

道德法の根本は神聖。是天尊の本然の聖意である。如来の神聖が人の道德心の基礎となる。正見は如来の神聖より人の意志に現はれるものと為す。正見とは道德の知眼の正しいこと、高等なる良心即ち神より出でたる良心を正見と云ふ。正見は公平無私毫も私なき知見なり。人は私欲に覆はれて正見を失ふ。如来の神聖は日光にて正見は如実に道を見るの眼である。神聖は善惡邪正を如実に照見したまふ智慧である。如来の神聖が人の眼となりて、此の正見の開けし人は、如実に有漏無漏うろうむ善惡迷悟の心の道を明るく照すことを得。此正見は自ら神聖光の中に明かに見る故に、惡道を避けて善道に向ひ迷を捨て悟りに達す。即ち如来の道を知見して行く人である。

正義。如来は道德行為を命ずる正義なり。如来無上の覺位は至真至善至美の極致なり。正義の道の終局なり。故に正義の者のみ如来の道を行く。

如来は捨惡選善、棄龜取妙の正義を以て至真至善の浄土を建設し給ふ。捨惡選善を以て本願として浄土を顯はす故に、如来の聖意は我等が惡を捨て善を取り給ふ。故に如来は本願の光明を以て一切衆生の心の惡を捨て善を選びて取り給ふ。

生物進化の過程に於ても、自然淘汰説の如く、自然中に弱きは捨て強きを選び正当なるは発達不当なるは衰耗すべき性が存在する如し。唯少分の現在のみを見ては其理は知り難しと雖、一切の生物が劣等より高等に進み不完全より完全に近づくを永く眼につくれば、自然に生物選択の性能有すと云ふことを得べし。

神聖と正義は、神聖は善悪邪正迷悟淨穢を正しく照す知見にして、正義は捨惡選善に向つて実践する足である。

如来は神聖正義の徳光を以て、我等が正見と正義の大道を如實に行はしめ、邪惡を離れ、正善に如来の大道を行はしめ給ふ。

恩寵は大慈悲。宇宙の一切衆生の慈母として、衆生の心靈を養成し給ふ靈力である。如来は一切の親として一切を愛育し、終局親の完き如くに完きに近づけ、親の眞善美の靈性を養ひ給ふ。

道徳の本源

如来は神聖と正義として父、恩慧として母に比す。この神聖正義恩寵の三徳が我等の靈徳を養ふ要素、一切道徳の本源なり。通仏教に謂ゆる法身と般若と解脱との三徳に比すべし。一神聖は如来が一切衆生の嚴肅なる家庭の父として我人の行為を照鑑し給ふ智慧である。神聖は行為を照す智慧なり。如来は天命の性の根本、一切道徳律の原則であります。神聖は明浄なる鏡の如くに如実に衆生の身口意の三業を照し給ふて毫も私なし。如来の神聖なる真理の光は太陽の如くに外界より照すに非ず、絶對なる大威力者より直覺的に衆生の良心に囁き来る命令の力なり。

宇宙には是の如きの道徳秩序の理性の存在することは、天の軌道に日月星辰が運行する理の在る如し。例へば天が生物を活すに保護性を賦する如く、又人の生を愛し死を憎む自然性の如くに、宇宙には道徳法が存在す。故に実に道徳法の原法は人為的法ではない。故に神聖にして犯す可からざる法則である。凡べて物には自然法爾ほうにの理がある。火の熱き水の潤ふ如く、善惡の根本的原理は法爾として定まつて居る。

故に仏教大乘戒の根本とも云ふべき梵網經に、道徳律の渊源は法性本然の法則にして、一切諸仏の造作に非ず。釈尊菩提樹下にて正覺を成ずると、直ちに道徳律の根本として菩薩の波羅提木叉はらだもくしやくを結し

給ふた。斯道德律の根本は釈尊自ら造りしにあらず。法性本然の真理なることを現はす為に梵網三昧に入り給ふた。すると釈尊の本地本仏の境界に成り給ふた。

曰く「我今盧遮那方に蓮華台上に坐す。周匝せる千華の上にまた千の釈迦を現す。一華に百億國あり、一國に一釈迦あり、各菩提樹下に坐して一時に仏道を成ず。是の如き千と百億とは盧舍那を本身とす。千と百億との釈迦が、各微塵の衆を撰して俱に我が所に来至して我仏戒を誦するを聴いて甘露の門即ち開けぬ。是の時に千と百億の釈迦還て本道場に至て各我本師の戒十重四十八を誦す。戒は明な日月の如く亦瓔珞珠の如し。一切の菩薩衆是に由て正覺を成す。是盧遮那誦し給ふ。我も亦是の如く誦す。汝新學の菩薩も頂戴して戒を受持せよ。是の戒を誦し已つて轉じて諸の衆生に授くべし。諦に聴け。是正しく仏法中の戒藏波羅提木叉を誦すべし。大衆心に諦かに信ぜよ。汝は是當成の仏、我は是已成の仏なりと。常に是の如きの信を作さば戒品已に具足す。一切心あらん者は皆心に仏戒を受くべし。衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る。位大覺に同じ已りなば、真に是れ諸仏の子なり」と。

此意は道德律の根本は法性自然の真理、神聖にして、またこは普遍的真理なれば千聖も交へず万仏

も改めず、大宇宙の中心本尊たる盧舎那仏が有らゆる分身の釈迦を徵集して自ら誦し給ふ。此の神聖と正義とは道德律の根本とす。

恩寵の體現

恩寵開發すれば、人格革新し、靈化の意志情操及び一切活動せる心を支配す。いかに道德自修して波羅密即ち彼岸に到達すべき。波羅密は常恒の過程不斷に勝進して神的意志を實現的に行為すべき性格を鞏固に練修せざるべからず。神聖正義の觀念を實現せんに、注意を緩むる時は、六賊競ひ來りて劫奪せんとする二河白道の譬説の如く、貪瞋の二河動もすれば、心靈の白道を侵害せんとする勢を呈す。常に注意と勇健なる意志にて心靈が如来の觀念より出で、之を改むるに非ざれば敗北を免れず。外寇恐るゝに足らず、自己の自我に潜伏せる賊首を断伏することを難しとす。

菩提心道德自修し、従來の習慣を変じて靈的性格實行を練習し、六波羅密に如来の恩寵によりて實行的道德性を長養せられ、更に一步々々に進みて、改善的に精進し、能く心靈道德心を長養し、性格

の改善は心靈が機制我を制し情操を鞏固にす。情操更生の靈的生活と靈格が改善の道德的過程と共に連絡して全を得べし。

心靈の稻を播き、耕耘を怠るときは目的である秋收好果を見ること能はず。

人は恩寵獲得せるも機制のあらんかぎりは、罪惡の種子断尽すべからず。故に常恒に心靈と我と健闘をせざるべからず。恩寵を獲れば惡を制伏するに便利なり。惡の衝動は善の衝動を以て之を制し、靈と我との健闘日々に新たにして、また日に新たならざるべからず。消極には我より出づる惡素質を滅殺し、積極には恩寵により心靈を益々増長せしめ、惡欲望を抑制し善欲望を亢進せしむ。

無礙光は解脫の徳

無礙光は処として融化せざるなき解脫の徳。

頌に、如来無礙の光明は無上菩提の態すがたにて世の約束を解脫ては真我の自由を得せしめぬ。上の二句は無礙光の徳相を標し、次の二句は、大用をあぐ。無礙とは、消極的には人の宗教的性に適せざる性能、主我幸福及利己的欲望等を脱却、積極には如来の聖意に變化し、真理の目的に協力して行動すること。

無上菩提は宇宙大道。即ち宇宙心靈には万物を如理に向上し、道德秩序ありて、万有を如実の道に率いる理性の存在あり。之を阿耨菩提あんのくはだと名づく。是宇宙最高実在を中心とする道德律なり。

世の約束とは、人は天然なるは性質にして靈性未だ開發せざる程は、世界の相待に規定せられ、機制我のために眩惑せられて、宇宙最高の目的に参ずること能はず。之を解脫するは消極的方面にして最終目的に摂取して協力せしむるは積極的方面なりと為す。

無碍光の性質を論ぜば如来の一切智と一切能。無辺光としての智能は即ち純粹理性を照す即ち理論的の性格にして、無碍光として一切智能は実行的を照す処の光即ち倫理の光明なり。

如来一切智と能との徳性をもて、規律に順ふて之に参与する処の心靈を開発し、悪質を脱却し、終局目的に協力せしめて無上菩提を得せしむる勢力なり。

宇宙大道

如来の性能なる宇宙大道に二面ありて、斯大道が天則秩序としては、万物を開展し摂理する処の天命的性に万物の秩序を統一し摂理する処の理性として存在し、天則的に世界道德秩序の理に随つて万物の生命は向上発達す。

自然界の發達は有機界を現化し、有機界の中に植物は動物を現化し、動物生命の向上は人類の心靈的生命を現化し、地球上に現れたるもののうち人類の心靈的生命を最高とす。天則秩序の自然界を開展向上発達することは、心靈的生命心靈生活の最終の真理真善の目的に到達せしめんための方便なり

と云はざるべからず。

如來は宇宙廣大なる設備を以て万物を生産し担保し統一し摂理す。要するに万物の生命に成仏を得らるべき性能を賦与し、またこの目的たる靈性を顯動態にせんがために、天則的に生命を向上發達せしめ、万物の根底は法身を實體として靈性を本能に具有するは、之を如來の性起と云ふ。また一方には終局目的の理性を顯さんが為には、法界緣起として報応等の恩寵と現はれて一切を摂取す。

世界性ご人性ごは自ら解脱する能はず

世界性とは因縁約束、即ち相待に規定せらるる此世界万物は、自然に規定せられ因果に約束せられて、而も自ら道德的自由を得ず。即ち自由意志なき処、故に惡即ち不道德なるは世界の自然なりと云ふことを得べし。

人は自然と同じく自然の産物なる人にして人の精神的過程は因果律に支配せらる。身体及精神共に生理過程は自然律と因果律に規定せらる。同一の性質構造を有する有機体に同一の刺激を受るときは

全く同一に反動す。

身体及精神及性質等の遺伝も因果律なり。生の原因に於て、父母の所生にして自己の選択によりて若しは男若しは女と生れ来りしにあらず。身体氣質性慾感官知力を遺伝し先天的にまた後天には其家庭教育社会の風俗習慣時代思潮の為に規定せられ、先天の性質後天の周囲の事情に鎔化せらる。故人は自然律により因果に規定せらるる世界性なり。

自然及び因果律の世界的産物の生理機制を實に我と執し、機制は肉慾我慾、我に自由を与へず、自ら生理の慾に自己を肉慾の奴隸とし道德の罪人とす。天然の人は利己本能の幸福の本能に加ゆるに氣質性分等の機制に制限せられて自由を得ずして、自ら云ふ、性分は自己の能くせざる処と。

世間の道德の規定たる良心と名づくるものも、其時代と土地の風俗習慣に規定せられたるものなれば、良心なるものは規定によりて転変するが故に、全くは道德の意志の根拠とするに足らず。他の意志或は動機に随つて発動し他の事情或は風俗のために規定せられたるものにして眞の道德の根拠にあらず。

世界的相対的なる善悪は、世界の根底に立つが故に、世間の毀誉褒貶によりて動されざるを得ず、

維摩經に、善不善為不二。若不_レ起_二善不善_一、入_二無相際_一、而通達者、是為不二門。亦罪と福を二と為す。若し罪性と福と異なること無しと達すれば不二門と為すと。

相待なるものは、善の反対は悪なれば、善も根元的善と云ふ可からず。或事情の為には亦悪と変ず。故に絶対的道德の根底に立たんとせば、本より機制我は根本的悪なるものと認定し、世界相待規定なる意志は、善の如くなるも転変極りなければ、未だ真の道德の根底にあらず。また世界性因果に規定せられたる習慣性もまた、自ら解脱すること能はずして、人は煩惱の奴隸となり、相待規定の世界に依属し自ら解脱を得ず。

然るに此世界なるものは、如来藏自中_レ存在なるも、吾人が因果に規定せらるるは、是よりは高等なる如来真実の目的に達すべき方便有余土として真に価値あり。

現世界は本如来の本体中にして、人生の最根底の靈性と世界の根底たる実体とは同一本質にして如来なり。如来中の世界及び自己なれば、機制我の最深の奥なる一大真我を發見し、如来の聖意の大海より聖意の実現とし、如来の目的に随順して行動するを無碍自由と云ふ。人は如来真我の中の心靈我として始めて自由を得べし。

無碍光によりて解脫

人の天性機制我は生理の慾即ち肉の我なれば、利己幸福の外に他を顧みるの暇なし。自己及び世界の最根底たる一大真我を發見し、此真我は即ち無碍光明。吾人の心靈は、此光明によりて、絶對なる道德の根底とす。一大真我の中なる我としては、宇宙に輝き、神聖なる智光長へに照し、無限の慈愛に同化せらる。此根底に在る心靈は不動の道德心の源泉にして、いかなる境遇にも不退転なり。

如来の無限なる愛の泉源より湧出づる愛は、万人に交通し、如来大我の中にて、一切の生物と根底を同うし、彼我の差別なく、是非善惡を超越して、絶對なる如来の愛によりて相互に融合し、万物と我と一体にして、如来によりて相互に相愛す。

如来の神聖なる光明は長しへに我心靈を照し自律的に道德の規定となり。如来の正義は吾人の心靈に主我を捨て公正なる如来の聖意の中に行動すべき力を与へ、個人目的を超えて如来の最終目的に協力せしむるに無碍自由を得しむ。

客観的正義 (社会制度及選択本願力)

正義は消極的には如来の聖意に背く処の素質を脱し煩惱を断ずる徳。積極には如来の目的即ち無上道徳に協力して活動する義なり。

宇宙大道に正義の性能存在し、之にそむく者は永く真理に捨てらる。此大法に離れては長く活べからず。此大法に加はるものは共に向上し、高尚なる理想抜群なる勇氣、宇宙的同情、如来の目的を己の目的として、道徳に無限の力を得て活動す。如来の源泉より湧出る英氣存すればなり。

絶対的大道の正義は、客観的道德と現ずれば社会制度の道德制裁となる。

選択本願力。

自然なる世界状態は、如来の理性を根底とするも、自然に世界性情の性質存するを以て、この性質の中より真善の安寧国を建設せんが為には、道徳態の選択的正義の性能なかるべからず。選択とは客観界に有る処の龜惡を捨て妙善を選択するの謂なり。

如来そんがく選せん採さい本願力を以て淨仏国土を建設すとは、宇宙大道に含蓄する正義の勢力、即ち終局目的の眞善美の靈界を顯はすべき理性を、具体的に説明したるに外ならず。

正義は兪惡の国土より妙善の淨土を選採する勢力なれば、此選採的正義は如実の判断を以て取捨に於て憚ることなし。選採的正義を捨てては妙善の淨土を顯現するに縁なし。

自然界に現るる選擇正義

宇宙大道の正義の勢力は自然界の中にも常に行はれあるを見ん。見よ。自然界は大道の正義を以て万物を律す。大道は自然界を向上し終局目的の手段たる世界として此向上の目的に率ふ者は益々發達し、進化に努力し爾らざる者は亡ぶ。天体の星宿が渾沌の状態よりして自己の性能を遂げんとして向上に努力するものは、円満に成就して恒星となり、また遊星となり、軌道に順つて運行し、能く万物を化育し、完全たる星界として道德秩序の世界となり、無数の聖賢を出す。此勢力に順はざるものは渾沌の状態より円満に達する能はず、性を遂ぐる能はずして遂に分散し消滅す。能く大道の勢に順ふも

のは益々進化し整然たる秩序により善美赫々として光を放つ。

視よ、選択正義は自然界にも歴然として現はれたり。然るに自然界は此よりは高等なる心霊界の終局的ある世界としての存在なれば、尙進んで真理の目的なる心霊界の真善美は、また一層高等なる選択本願の正義の勢能を有す。

世界に行はるる選擇本願の正義

選択本願は国土の轟妙人天の善惡に於てす、客観の方、不道徳不正義は目的には有べからざるものとして選擇せらる。

選択本願力は世界を超えたる彼岸にのみ行はると謂ふなかれ。正義は世界に行はる。正と善とは世に賞揚せられ、邪と惡とは人に嫌忌せらる。善は明にして惡は闇なり。惡は消極にして積極的の性なきなり。善は向上し、発達すべき性を有し、惡は遂に亡ぶべく没すべき性なり。

惡は善に対して障碍を加ふるも自己の目的にあらず。ただ善を飾る器具に過ぎず。釈尊の本生經に

かの提婆調達が生々に於て釈尊の正善に向て沮害を加へたるも帰する処還つて仏陀の正善を裝飾せる金箔となるのみ。

不道德の盛なる社会には私慾を以て相互に残害し相吞噬して共に苦惱するは、社会が双方に与へる罰なりと云ふべし。

賢聖世に出で衆生を救済し道德に増進する道を人類に与へ、此大法の為に力を竭すは全く宇宙大道如来の権化と云ふべし。

心靈的生活なる人類を養ふべき方便土なれば、此の世界にては益々向上のために邪と悪とは悉く淘汰せられ選択せられ、大道に合ふものは選択摂取せられ、進化の適者生存の理によりて益々健全に進み行くを見る。之に適せざるものは亡ぶ。是自然淘汰の義なり。

世に不義にして富み、不道德にして貴きものは、唯肉の上のみの幸福にして心靈は少しも幸福を感じざるなり。世に正義の存する所以は、苟しくも理性を具ふるものとして善を称揚せざるなく悪を擯斥せざるなし。さればとて善人が有形の幸福を得悪人は不幸なりと云ふにあらず。善は榮ふべき性、悪は亡ぶべき性なるを云ふ。また人についても悪は一時僥倖の為に一時隆なるも必ず亡ぶべき性を有

す。看よ盜跖が悪を以て僥倖の生涯を送りしも数千年の今日にして衆人悉く彼を責む。

人が正善を称揚し邪惡を嫌忌するは自然の理にして、惡は抽捨せられ善は選取せらるべき理法が客觀界に行はるるにあらずや。如来の正義は世に行はる。惡徳の社会は闇黒にして、正善なるは光明の歴史として顯はる。

現世界は方便土

若し果して世界は如来の正義選採本願によりて淨土を顯現するとせば、世界は全く善美の莊嚴を以て充さるべきに、現に世界は惡に充さるゝにはあらずや。云はく、如来正義、現世界は方便有余土として価値あり、方便土とは世界はこれよりは高等なる心靈界に進むべき階級としての世界なれば、いかにして目的に進入すべきと云ふに、即ち如来は正義を以て選採す。龐と惡とは選捨し妙と善とを選取す。方便土に生れて終局目的の理性に適せざるものは不合格として捨てらる。かゝる人類はいかに幸福なる生活なりとも、ただ地殻の発達を養ぐる生物に過ぎず。人は世界の最深の意義目的をさと

目的ある世界として、自己の心靈を開発し社会に客観的淨土を建設するの一員として全力をつくし、相互に策勵し正義の悪をすて善を選び、世界をして理想の淨土たらしめ、人類をして菩薩聖衆たらしめん。

經に諸々の菩薩常に正法を宣ぶ。智慧に隨順して違ふことなく失ふことなく、すべての万物に於て我所の心なく、染著の心なく、去來進止、情に係る処なく、意に隨て自在にして適莫することなく、彼もなく、我もなく、競もなく訟ることなく、諸の衆生に於て大慈悲饒益の心を得たり等。

現世界は如来の正義の幡をたてて、我及び世界的動機より起る煩惱賊と健闘し、念々進勝し歩々向上し、目的に歸趣すべき方便土として、力行して止みなむ。

現世界は成しうべきかぎり数多の聖賢を出し靈的生活の人を造り出して方便土の性を遂げたるものと云つべし。

是如来の正義に努力したる世界なり。是如来が宇宙大道に、正義の勢能を以て世界に与へたる理法なり。

神聖は道德の一大原則

金剛自性光明遍照の清淨不壞、種々業用と方便加持を以て金剛乘を演のびて、唯一の金剛能く煩惱を断つと乃至五智光照常に三世に住して暫くも息むこと有ることなし。

是如来金剛自性じしやうの光明は即ち真理、真理はいかなるものもの為にも破壊されざる処なり。如来真理の智光は神聖なり是神聖の光能く衆生の心靈を照臨して如実の道に乗して菩提を得しむ。

如来は神聖態

宗教一切道德律の根底とし、自己心靈の為に光明を与える根底中心として、如来は神聖態と見ゆ。人は心靈開發如来の中の自己としては、道德秩序の神聖なり。

如来の神聖は絶対的真理にして絶対的道德の中心なり。是一切道德律の一大原則にして、無上権理を以て方法を統治し、一切を規定し命令する理性なり。

神聖は道德を普遍的に約束する命令性なり。真理は普遍的なれば自己のみにあらず凡てのものを約

束す。

如来神聖は真理にして何人も拒むべからざる徳性なり。絶対真理にあらざれば普遍的に行はれ無条件に一切を規定することなかるべし。神聖は無上の権ありて侵すべからざる光を以て道徳を自律に制裁するのみにあらず、また一切心靈の根底として一切心靈を統一摂理する処の理性。神聖の光明によりてすべての心靈を向上し、如実の軌道に則らしめて終局目的に帰趣せしむ。如来の神聖は個人的心灵に真実即ち至誠心しじやうしんとして現ず。

形式と目的

世界的動機と個人中心としての道徳には、形式論的に、良心の命令による義務の觀念より出づる行為は結果のいかに拘らずすべて善なりといふ形式論と、また行為の結果より割出す目的論的主義とは、道徳意識の標準を異にするも、相待規定を超たる絶対的真理なる如来の神聖の命令として、吾人の心靈に湧きいづる形式即ち心靈は道徳の司導者にして、之に随ふ行為の結果は終局目的に協ふて無

上菩提に到達する。形式と目的と一致す。故に如来の目的は進化に努力して止まず。真善美の終局に向ふは目的なり。この目的に達すべき大道を照すの光明は神聖にして人の心靈に命令す。この命令に順ふ心靈の向ふ処は必ず如来の目的にあずかる。自律的に道德の標準に随ふ。如来の目的を以て自己の目的とすればなり。

故に如来の神聖による心靈の道德的行為は形式と目的と自ら一致す。

自律と他律

宗教道德秩序の根底、道德の制裁につきて、文化の階級によりて、自律なると他律を要するものとあり。

人が世界因果の支配の下に立ち、絶対なる如来によりて直接に道德の規定とならざるものためには、他律を要す。或は旧約の十戒の如き、また仏教の人天教に五戒十善あり、また小乗の戒律等各条件を以て道德を制裁す。其の律法を犯すものには某の報あり等。また其の律を犯すものは神の怒りに

觸れて相当せる罰ありと。故に某々の条件を守るべしとの如きは、条件を以て、他に約束せらるるが故に他律と云ふ。此他律に相應する処の宗教的意識には、条件の律法が無上の権を有し神聖にして侵すべからざるものとす。

進んで世界規定を超えて如来の一大真我の中に生活する処の心霊には必しも他律を要せざるなり。如来は絶対的真理の光明を以て人の心霊に儼臨し、之によりて自己を返照し、心霊を神の声として其標準に順ふて自ら無条件に道德を制裁す。

自己胸中の神聖の声は、すべての悪を遮して諸の善に進ましむ。自己と云ふは一大真我よりこの心霊に輝き来るもの。如来の聖意と一致するが故に自ら道德律に相應す。

経に、諸悪莫^レ作、衆善奉行、自淨^ニ其意^ハ、是諸仏教と。

自淨其意とは是自律的道德、この自なるものは一切諸仏と同一の根底なり。此神聖の声に應ぜざるものは真理に背くが故に闇黒無明の地獄に墮す。終局目的に交ること能はず。

如来より出づる心霊は自律的に真理に順ふべし。起信に法性^{ほうしやう}の体は無慳貪なるを知るが故に隨順して施を行ふ。法性無染にして五欲の過を離るるが故に隨順して尸羅^しを行ふ等。

心靈は自律に道德を立るのみにあらず、また自から其規律の標準に随ひ、神聖の命令の下に行動す。如来の神聖が、吾人の心靈を通して、自己の一切の意志を支配す。絶対より自己に湧出るが故に、実は自他を超越したる道德律なり。

宇宙心靈即ち如来の神聖態を、純朴なる天然の人は、之を天命と云ふ。即ち天とは蒼天に一種の真理ありと認めて、世界人類の生死禍福も是上帝の命令とし、天命は侵すべからざるものと信ず。是等は天則の理法の方面のみを知るのみ。天とは一大心靈、即ち三身一如の如来身なりと唱ふる如き高尚なる理に於ては未だ明めざる処なり。

主觀的正義——心靈本務の形而上根底

主觀的正義とは如来の絶対的聖意が、一切の主觀的に実現して、正知見の命令本務を果すべき性能なり。

如来の正義に随ふとは、吾人は消極的には聖意に適せざる自我を排除し、積極には聖意實現的に行

動すべき性能なり。

正義としては、吾人は自己に潜伏せる靈性を開展し、如実に本務を果すべき性格及び行為を以てまた自己の生命を向上さすべき責任を有す。

主観的正義は、如来の真理の光により、正知見より、心靈的衝動が本務を果さんとする勢力なり。主観的正義は肉我衝動即ち一切煩惱を排除し、靈我衝動よりの行為を正義とす。

消極には主我及び主我より出づる肉慾我欲等を犠牲にし、積極には如来の目的に協力し実行す。正義としては無上道に進趣する過程に於て、善悪邪正を如実に裁判し如理の判決を下す。

人の一切の不正の根本は主我なり。我なる主人が已に心靈に服従する時は之に屬する我意の慾望不正の意志等は自ら降伏せざるを得ず。

如来の正義は選択本願力として一切の人類に命ず。

本願力とは、聖意が一切を開展し、如来の目的に隨順する者を攝取して、無上道に帰趣せしむべき勢力なり。本願力は選択の理性なり。聖意の目的に帰するものは之を攝取し然らざる者は捨てられざるを得ず。

吾人が一心を如来に投歸するに如来に適するものは心靈なり。機制我は因果に規定せられ如来の目的に適せざるものとして捨てらる。

我の意を自力とし、如来の聖意に適合する一心を他力と名づけたり。故に我意即ち自力をもつては本願力に摂取せらるることなし。我意を如来に歸命すれば遺る処は心靈のみ。此心靈は聖意に合一す。之によりて自ら如来の真我に参与し聖の目的にしたがふ。

如来の聖意に歸一したるが故に正義なり。聖意の司導の下に立ちて正義の旗をあげ我意と健闘す。道德秩序の中に正しき判決をなす。

我意は己が幸福より利害得失を根拠として行為を命ずるが故に真理の標準に拘はらず。

如来の聖意の個人現としての正義の裁判は公平無私なり。吾人が正善の行為には自ら満足の賞あり。不正の行為には苦悶の罰を感ず。正義として、善悪共に時々心に賞罰免るること能はず。終局の判決孰か免るるものあらん。若し心靈の賞罰を感ぜざるもの如きは己に正義なる人道より墮落したる漢^{やま}なり。

正義の積極的方面は如来より賦せられたる自己の伏能を充分に發展し、靈能を實行し本務をつくす

なり。聖子たる天職を果すべき本務たる克己勤勉忍耐剛毅等を以て、即ち向上し進化し聖意の実現に力行するにあり。自己の伏能発達して後にはいかなることに対しても安忍することをう。

如来の聖意実現としての正義なる本務を果さんが為にいかなる艱難をも忍ぶ時は、務に慣れつひに困苦を感じざるに至る。聖意に協力する勤には快樂あり勇氣あり。

導師曰く、眞実心中に自他の諸悪及び穢悪を制捨し、眞実心中に自他凡聖の善を勤修すべし。又云く、一心に唯仏語を信じて身命を顧みず決定して依行せよ、仏の捨てしめ給ふものは即ち捨て、仏の行ぜしめ給ふものは即ち行じ、仏の去らしめ給ふものをば即ち去れ。是を仏教に随順し仏意に随順し是を仏願に随順すと名づく。之を眞の仏弟子と名づく、と。

是如来の聖意実現の意志なり。

恩 寵

宗教意識には、如来は吾人の意識に対して恩寵なり。

恩寵に方便と目的とあり。方便としては、自然界は法身の一切智能によりて生産担保せられたる万物なれば、宇宙の天地を開展し万物を化育する勢力も本如来藏性の内在なれば、世に所謂天の恩恵と云ふ。この勢力によりて此自然界は担保せらるるものとすれば、天の恩恵また如来の恩寵に外ならず。宇宙万有一として如来の体相用を離れたる一物もなければなり。唯自然界は高等なる目的ある方便土と見る時、自然界を維持する勢力に対しては、ことに恩寵の感深し。まして生滅転変因果規定の生滅世界より絶対無限の永恒なる如来の中に摂取せらるる性能に対してはことに恩寵の感なかるべからず。

恩寵に方便と目的との二方面

如来は宇宙万有に存在し、自然界の万物悉く如来の一切知能の発現なりとすれば、万有の生存は高等なる目的ある方便の世界なり。

如来は無限の勢力をもて一切の生命を保存し天地万物と現化し日月星宿を化育す。また万有には自

発的に發展すべき性能存在し、如来内在の万物として宇宙は調和と階調をもて万物を化育す。

太陽の力地球万物を化育し、地上の万物悉く如来の發現として、吾人の生命を保存すべき万物なれば、太陽の光熱の地上の植物、野に笑へる花苑に香ふ草、なにかは恩恵の化現ならざらむ。全能力を以て万物を化育し吾人を生存せしむ。天地万物一として恩寵の充ざる処なし。

吾人此生を稟くるに哀々たる父母の恩を感じず。父母のまた父母祖先より生物原始の源に溯り、祖先及び原始生物は犠牲的に其任務を尽して、乃至、現在の吾人に至るとすれば、すべての生命が、皆終局的に對する手段として、天職を尽して、乃至、吾人に到ることも、また万有内存の如来の勢力として、法身如来の知能によりて、万物は造化せられ吾人を生息せしめ向上發達させんが為なり。

宇宙最深の意義を宗教的意識として観ずるときは、万物の中に如来の恩寵を認めざる処なし。汎神論的の仏教に四恩を説き、また天地草木等の恩を説くは、万有に如来の性能存在せる理、また目的に達すべき方便としての生存に對し、恵を受ざるを得ず。恩寵なりと云はざるべからず。

終局目的としての恩寵

天則秩序に世界万有を生育し生物の生命を向上しつひに精神生活にすましましめしは、終局目的に擬取し靈化せんが為なり。如来はことに深遠にして高妙なる性能として、吾人はこれに対して天則の中によりは一層深く恩寵を感じざるを得ず。

吾人が天則によりての生存は、相待に規定せられ生理に制限せられて、自己の意志に満足を与へ理想を満しむるに足らず。心靈無限の苦悶は終局目的の理性によりて解脱することをう。

此によりて高等なる宗教意識の為には、目的としての如来は無限の恩寵なり。因果規定の相待生滅の中より絶対無限の靈界に摂取する理性として、亡びたるに回復の寿を与へ、闇黒の中に無限の光を得るなればなり。即ちこの目的に摂取せんが為に、心靈を開発し聖種を増長せしめんが為の啓示と解脱と靈化の恩寵として実現し来るなり。法身を根底とする生命なれば本より靈性具有するも之を開発し靈化するの契機によらざれば目的を達する能はざればなり。

衆生はいかにして解脱を得べきぞ

起信論に、真如は本一なれども無明煩惱ありて差別す（生と仏と）。之を解脱するに、仏法に因あり縁あり具足して乃ち成弁す。喩へば木の中に火性あり、是火の正因なり。若し人知ることなく方便を仮らずしてよく自ら木を焼くと云是理りあることなし。衆生亦然り。正因薰習の力ありと雖も若し諸仏善知識に遇ふの縁なくして自ら煩惱を断じ涅槃に入るとは是理りあることなし。乃至因縁具足し諸仏菩薩の慈悲願力に保護せらるるが故に、志を發し善を修して涅槃に向ふと。

文の中に因とは、仏性を根底とし、また自己の遺伝に、恩寵として、本能に予備を造れり。然れども夫のみにして人は自ら開發することなし。

法界流布即ち世界に流行せる、人類の中に含蓄せる仏法によりて、如実修行の動機即ち縁となり、進んでは直觀的に客体としての如来の恩寵によりて、因縁感応によりて恩寵開發し終局目的に参与す

ることを得。

恩寵三種——三緣慈

如來の恩寵即ち無緣の慈悲は法界に遍滿して、之に接觸するものとして解脫靈化の益を被らざるなし。

しかるに宗教意識の階級によりて恩寵に接するに直接と間接なるとあり。之を三緣慈と名づく。三緣慈と云ふも法相家と天台家とに於て解釈の異あると同じく、いま同じからず。

無緣慈

如來の恩寵一切慧と能との勢力として法界に周徧し、之に觸るるものは心靈開發し解脫靈化せざるものなし。即ち三徳の光明普く一切處に遍照し、譬へば太陽の光熱化学線がよく物体を照すが如く、

如来の三徳光明は普く心靈界を照す。心の智力には啓示として光線の如くに仏界を見せしむ。心情には熱の如く慈悲よく融合し苦を抜き樂を与ふ。意志には化学線の如く人の悪を転じて正善に變化す。斯恩寵本然として存在し、過去一切諸仏之によりて正覺を成し、現在一切聖者此によりて知見を与へられ、未來一切の賢聖之によりて解脱せらる。この恩寵一切聖賢の父母なり。また心靈界の太陽なり。聖者の生命なり。心靈の糧なり。其味宇宙と共に無限なり。是宇宙万有の父母なり。万物此恩寵によりて化育す。一切聖者は之によりて生活す。

一切諸仏の父母たるのみにあらず、恩寵一切処に遍在して靈界の光となり壽となりて、心靈已に開展せるものは、常に此中に安立し糧となす。

恩寵は如来の慧と能とにして万有中に存在し内にあらず外にあらず、唯心靈にのみ直接に觸るるものなり。

聖典に、如来以_二無縁慈_一摂_二諸衆生_一と。如来無縁の慈は永恒一切処に徧在すれども、心靈未開の衆生は直接に恩寵に感觸して親しく縁ずること能はず。是によりて此恩寵より報応及び菩薩聖賢の身を示現して一切を救靈す。ここに第二の法縁慈となる。

二 法 緣 慈

無緣慈は絶対無限常然自爾の性能にして、心靈開發せる聖者はこの靈能によりて心靈生活す。然るに世界因果生滅に規定せられたる天然の人は親しく縁ずること能はず。故に如来本仏より方便法身を示現す。これに二身あり。一、救主。本仏の恩寵を代表し権化として衆生を救霊す。二、教主。各々の世界に人格を以て衆生を教化誘導す。前者に因果二位を示す。因を法藏と曰ひ、大願大行をもて、衆生一子の無限の慈悲を表す。果を十劫正覺の阿弥陀と号し、無限の光と無限の寿との報身とし、本仏と一体一如なることを示す。已に果位としては始本不二なり。

極樂は無為涅槃界、造作を離れ因果を超えたり。然れども一たび迷ひたる衆生をして感じ易からしめんが爲に始成の門を開く。已に門より入りぬれば本覺真如の都なり。

若は因若は果、悉く如来恩寵の顯現ならざるはなし。

次に教主釈尊。五濁ごだくに出で無尽の大悲をもて人民を教化す。また六方恒沙の世界あり、諸の仏陀各

其國に於て救主の本願力を称讃して衆生を開化する。

一切諸の仏陀及びもろもろの聖賢は、本仏如来の一大恩寵より、方便法身として世に出て衆生を教化す。

或はキリストの贖罪と顯はれ、マホメットの劍の救と現はれ、達磨の西来意、善導の勸化として、永恒本然の如来の本有の慧能は、性相常然として法界に周徧するも、相待規定の世界の衆生には、之を直接に感知すること能はず、之が為に方便法身を現じて其時機に応じて教化を垂れ、法方便宜を以て衆生を救済するの契機を与へたまふ。かゝる契機によらずして直ちに絶対の無縁の慈に接すること能はず、この契機によりて一切の衆生に救済の便宜を与ふ故に法縁慈と云ふ。

法縁の慈とは一宗教の教祖等の、世界に於て救済主としました民族のために教祖と崇められ宗教としての神を代表せるもの、人格を以て恩寵の権化とし一慈の下に人類を救霊せんが為の契機として遣はされし者なれば、此らの恩寵の化現を第一法縁の慈とす。

三 衆生縁慈

第三衆生縁とは、如来無限の恩寵に、法縁の慈悲たる教祖教主として世界に現じ、それよりは民族的宗教の個々を聚合せる団体の中に含蓄し。各々個人の心機に恩寵が存在し、宗教意識に存在して個人若しくは家族の愛として現はれ、また善知識の心殿に宿れる聖靈とし、之より発動してそれに接触せる人の感ずる愛火と現はる。

起信論の差別縁に相当す。或は眷属父母恩愛の中に流出する如来の恩寵、あたゝかなる母の家庭の中に子を養ふが中にも、師友の間には熱心なる愛火に接近する同化力と現はれる等、如来の無限なる恩寵の天空の中において已に心靈の開發する時は、常に無限の泉源より個人の心に現ずる愛、父の胸中に充る愛が子に対する家庭の知識となりて變化する如き、社会に於て相互に愛の眼を以て相視慈心を以て相接する如き、すべての個人の中に存在し而して相互の中に相愛親和の力となるは衆生縁の慈と名づく。

無縁の慈は本仏如来の本然の恩寵、一切慧と能との性能として存在し、之に触るるものを解脱靈化せしむる一大元素なり。之によりて一切心靈生命を保持す。第二法縁慈は第一恩寵より世界人類或は民族の救主教主として化現する人格顯現、一般人類の為に救度の契機として恩寵の權化せんけと現ず。第三は個人及び家族等の師友善知識としてまた相互の相愛となりて現はる如きを云ふ。

三縁は其縁ずる処に隨て大小とまた直接間接とを異にすと雖も、本一大恩寵が各方面を異にして現はるるものにして本質に於て別るるにあらず。

絶対的實在と仏陀又は神子としての權現と、機能中に含蓄顯現との異なり。

知識の恩。第三と第二とは人格を要することは、世界の生理機能の人類には、直ちに無縁の恩寵に親縁すべきものにあらず、必ず第三また第二の媒介によらざるべからざること、恰も小児が生ると共に植物または肉類をとりて栄養として之を消化するの力なし。必母の乳によりて養はると同じく已に信心成熟せる者は、親しく如来の無縁の慈の中に啓示し融合し愛化せられて、靈の生活をなす。初発心の輩は善知識の為に愛化せらる。

善知識に充たさるる恩寵によりて同化せらる。または権化が贖罪の苦難によりて吾人は罪惡の中よ

り救済せらる。之を怙たのみとして、又は善知識教父に受けつゝある恩寵によりて自己の救済を仰ぐが如きは、信仰の嬰兒として未だ如来の中の独立の生活にいたらざりしものと云べし。

已に信心成熟する時は如来の無縁恩寵によりて靈の生活にいたるべきものとす。

三 徳の連絡

無礙光は無上道德態。解脱靈化の徳性として宇宙心靈に含蓄し、即ち一切慧と能との性能にして、一切を終局目的に摂取する势能なり。

客観的正義としては絶対理性の勢力、道德的秩序の原動力なり。悪は却けられ善は栄ふべき選択的理性を有し、神聖は如来の理性即ち智慧の光にして一切の势能を照す。恩寵は同じく一切慧と一切能にして闇黒の中に光を与へ、亡びたるより復活を与ふる势能なり。

神聖は智慧の光一切の宗教意識に正知見を与へ、正義は智慧の能力として一切の聖意の実現に行動せしむる原動力なり。

正義は聖意に適せざるものを捨て目的に協力するものを摂取する故に恩寵に摂せらる。恩寵によりて心霊開発し、靈性を回復せらる、靈性回復するが故に、神聖の光の中に自律道徳として制裁す。自律は如理の智によりて正義としての本務を果さしむ。

本務を果せば如来の目的に随ふ故に恩寵加はる。恩寵加はるが故に之に対して本務を尽す。三者同じく如来の聖意にして相互に關聯して相離れず。相助けて無上道を成ぜしむ。またすべての心霊をして如来の中に道徳的自由を得せしむ。

無礙光は道德的光明

無礙光は一切能、即絶対意志にして、一切の精神を解脱靈化して、終局目的に協力せしめて、如理の活動をなさしむる原動態なり。

無辺光は般若即一切智慧態にして、此の光に依つて、各自の智慧は、絶対写象即ち一切慧の、個体発現なることを知る。

無礙光は阿弥の中なる個人をして阿弥の神的活動せしむる光にして、行為に関する光なれば道德的光明と名くべし。

經に、彼仏光明無量、照_三十方国、無_レ所_二障碍_一、是故号_レ為_二阿弥陀_一と。此光明即ち道德的世界秩序。此光は絶対精神の屬性として、清浄本然として、法界に周徧して、障碍する所なく、一切を世界依他起性の中より解脱して、神聖態に同化する所の勢力なり。

無碍光は解脫の徳

絶対阿弥の無礙光は、所謂解脫の徳大にして、処として融せざるなき勢力。法界に充滿するも、天然の人は依他起性の為に繫縛けいばくせられて、自ら自由を得ず。自己の意志、主我執著と世界依屬との、天然規定の約束の為に一として自由あるなく、人は天然の主我主義ならば自由なることなし。身は是四大及び諸の物質元素の仮和合物、心は受想行識悉く世界の因縁規定より成立せしものにて、世界の依他起を離るれば我なるもの有るなく、記憶写象し来りし集起心じゅうしんを一々物に還し、物質元素各本質に還し已れば、遺る所これ何物ぞ。故に天然の人は世界依屬の外に意志なき如き実にはかなきものにこそ。

人は、八識已上の真心即ち絶対阿弥の中なる自己、なることを意識して、始めて世界依屬を脱したるのみならず、世界は却つて自己精神の一部分たることを意識す。

然も写象して意識するのみにては未だ絶対阿弥の目的に協力したりと云ふに足らず、進んで絶対阿

弥の終局目的に協力して、解脱靈化の意志即ち無礙光の道德的行為の光明によりて、阿弥の意志実現として活動するに至つて、始めて阿弥内容に致一したる眞の価値あるものといふべし。

吾人は天然にしては、世界の一部たる機制的生物、実に哀むべきものなるも、其最深の奥に、自己本来絶対阿弥即ち真我の中に自己を投じ自己即ち阿弥の個体にして、無我の大我にして、無限真心と一なるの觀念には、無数の利土却つて真心の所現たるを識らん。

無礙光に二面ありて、消極としては一切の衆生の惡素質を解脱して真我の中に入れ、積極としては進んで阿弥の意志の大氣中に神的活動せしむ。こゝに至つて始めて、人は阿弥の顯現として、真理の目的の為に実行々動するものとす。此積極の方面を無上菩提と名づく。

無上菩提——無礙光

無礙光の積極的方面なる無上菩提は本来絶対の屬性たる一切慧と一切能との勢力にして法界に周遍す。此無礙道德的の光明は即ち阿耨菩提なり。阿耨菩提の本質は、道德態精神態にして本来法界に周

徧す。一切を神聖正義に同化すべき精神態光明なり。

道德の衝動に数種の程度ありて、例へば倫理的道德は天然世界動機主我執著にして、其衝動野卑なり。また進んで三種の菩提あり。所謂声聞の菩提縁覚の菩提仏菩提。二乗の菩提心は其主觀的方面には世俗人倫道心よりは遙かに超勝せるも、自利のみにして利他即ち客觀を利する光なきが故に甚卑怯なり。無上菩提のみ圓滿なる絶対なる道德心なり。

絶対の無上道德心態は一切処に周徧す。其道德心態の光明は精神態なる故に見ること能はざるも、朝日の光が無心に十方に朗なるに、暖気を蒙むる故に、草木無情なるも悉皆滋長する如く、無碍の心光普く照して、衆生の意志を靈化し神化して神的活動せしむ。

無上道德心は絶対にして、已に阿弥の目的に歸入したる精神内容に実現して客觀世界に顕はるるなり。阿弥の無碍の光としては無上道德心態となりて内外に照曜す。絶対の光は主我を超越して阿弥の中に致一したる精神内容に在りて、而して活動の勢力は客觀世界經過の中に顕現して、道德秩序の行動として現す。

無碍光に消極と積極

無礙光は十方に無礙にして、内外二界に実現する処の道德的光明にして、此光に觸るゝ者として益を得ざるはなし。此に二面あり。消極としては、衆生の一切の悪素質を脱却し、殊に行爲に関する処の一切心的悪質を消し、積極としては無上道心の靈態として精神生活に勤めしむ。

是心光は本然清浄にして、法界に周徧して、衆生の心機に実現して活動するものなり。人の意志には自我執と世界動機の繫縛あるも、この神聖なる精神態によりて、始めて無上道徳心を開展して、世界の繫縛を脱して、無碍の絶対なる真我と相應して、我もなく他もなく、悪は悪にして排除せざるべからず。此もなく彼もなく、善は善にして、行はざるべからず。

神聖同化の勢力

無上菩提の本体は絶対精神にして、一切を神聖同化する処の勢力に外ならず。この絶対の無上道心態は法界に周徧せる理性態光明にして、無碍に衆生の精神の内界外界に周徧して、業に循ひ縁に随つて発現すべき本体なり。是一切衆生を終局目的に帰趣せしむる処の勢力にして、一切に含蓄して、絶対の主観的道德秩序として、自律的に自利の勢力として、又利佗としては、客観的道德的秩序となりて、社会の中に光明ある社会制度として現す。絶対としては、主観客観共に之を統一すべき絶対の阿弥に実現す。元来無上道心とは、自もなく佗もなし。自佗彼我は衆生の妄情のみ。無我に行はるべき無上道心は、阿弥の聖意なればなり。

無上道心と云ふも、絶対菩提の内外二界に顕現なれば、上求菩提下化衆生、及び四弘誓願も同じく絶対阿弥の終局目的に摂取すべき勢力の各個人の顕現に外ならず。

無上菩提の性能

法に約して釈せば、阿弥の大願とは、絶対精神の属性に神聖正義恩寵の属性ありて、一切処に周徧

して、一切を度する性能を無上菩提と名づく。之は法に約して無上菩提と名づく。

理に約せば、法身藏性。即ち絶対精神には絶対觀念と能力とを有して、一切の個々を展開して、本体の終局目的に帰趣せしむる性能なり。

事に約せば、法藏の智より大願を発して、十方一切の衆生を智願力を以て摂取し度脱す。

無上菩提は無上智慧、正智見を開示して正道に帰趣する勢力を、法に約して菩提と云ひ、其他種々の名をもて、絶対真理の性能を論ずるも、名に迷うて実に種々の異体ありと誤るなかれ。

実を刻して論ぜば、阿弥の本体及び性能の外に、別に客体の勢能あるに非ず。無碍光の一切を展開して、阿弥の自己の中に、活動せしむるに於て、法に約して無上菩提の語を以て、阿弥の性能を示すに外ならず。

無上菩提即絶対阿弥の性能は、自然に不思議の業ありて、真如と共に、一切処に徧す。清浄本然にして衆生の業に循ひ縁に随つて発動す。無上道徳の本質は一切慧一切能、即ち絶対理性と絶対意志との相合せる勢力にして、法界に周徧して、一切個々の精神を展開して、また理性をもて統攝し、一切を自己の目的中に活動せしめて、帰趣せしむる勢力なり。一切に徧在せるが故に世界に含蓄せざるな

し。

絶対道徳勢能は、外界には、客観的道徳秩序となりて、社会の制度として現はれ、内界には、主観の道徳秩序として、自律的に如実の行動と実現す。内外二界共に絶対の両面に顕現したる同一理性なれば、絶対終局には同一に帰趣すべし。

無上菩提の内容には、神聖正義と恩寵との三屬性ありて、内界外界に於て常恒不斷に一切を度脱盡化す。世界の正義には、絶対理性を実現する勢能として、娑婆即浄土の道徳の極樂を顕現する勢力なり。

神聖態としては、世界に道徳的地上の浄國を發展し、神聖なる世界と發現すべき性能なり。

客観的恩寵とは、法界縁起の道徳として、人類を解脱し、恩寵を開展せしめ、無縁の慈悲を以て一切を度脱盡化する特質に外ならず。

神聖とは、自体にあつては義務を命ずる聖智なり。

正義とは、正知見の衝動として尽すべき義務なり。主観正義とは、自己の正知見によつて判断したる真実無偽なる理性、自ら道徳律にかなふの道徳行為なり。

主観的恩寵は、天然の自己を脱して絶対の真我に融合解脱靈化の態なり。神聖と正義とは正因仏性にして衆生性具の徳なり。恩寵は縁因仏性として能く正因を縁け、解脱靈化して了因仏性を顕現す。

神聖正義の絶対として、客観界にも、主観界にも、本来含蓄せる、華嚴に所謂性起の徳として、内部より発動すべき性能なり。

法界縁起の恩寵によらざれば無明煩惱の為に覆はれて自発する能はず。

歸趣せしむる性能

理に約して、法般解ほうはんげの三徳。法に約して、無上菩提。

此無上菩提の本体は、楞嚴に説くが如く、因縁に非ず、自然に非ず、和合に非ず、不和合に非ず、本、如来藏妙真如性、皆悉く清淨本然として法界に周徧せり、世界一切に含蓄せる理性にして、内に非ず、外に非ずして、而も内外あるに非ず、故に七大も皆即如来藏性にして、天然の性を離れ、非を絶す、凡そ十界依正色心悉く三徳秘藏の全体大用に非ずと云ふことなし。

一切悉く是菩提妙淨明の体。菩提の性能法界に周徧して、常恒に一切を度脱す。衆生及世界一切をして終局に帰趣せしむる性能を菩提と名づく。これ菩提大道なり。此大道によらずして終局に帰趣する理あるなし。此性能は生死を転じて涅槃とし、煩惱を菩提に覺し、氷の水と成るが如し。

本体の内容に永恒自中存在する、無上菩提の本質は、常恒に顛動の方面に常に活動を呈して、一切終局に帰趣の光を与へ、一切を開展して、撰取して捨てず。この性能を菩提と名づく。此大道の元氣は、幼稚なる天然教にては、天命、性に率ふを道といふ。その円満に發展したるを絶対精神態の菩提即大道とす。この大道の勢力は、永恒不斷にして、この含蓄的勢力が主觀に發動すれば即菩提心と名づく。

吾人の個体發動の菩提心と絶対の本質とは同一にして異に非ず。

無上權威の神聖態

無上菩提の本質は一切（）原則にして、絶対独尊の無上權威を以て方法を統攝し一切を約束し命令して、一切を自己に帰趣せしむる本体なるが故に神聖態。

阿弥は道德秩序即ち無上（）神聖態を建設する一大原（）、すべての道德的法規を制（）一切を神聖に同化する勢能の本体なり。

阿弥は無上權威の理性として法規として侵すべからざる大原理にして、命令的性質あるが故に神聖態なり。

絶対精神即ち大我の理性として一切を無上智慧を以て照す理性なれば、言を換えて言はば絶対精神大我の良心と名づくべし。

一切諸仏賢聖もこの無上權威の法規に軌つて成仏しこの理性に軌つて一切を約束す。阿弥は斯の如き無上權威の一大原理にして、一切を統攝し帰趣の本体なる故に、經に、無量寿仏威神光明最尊第一

にして諸仏の光明能く及ばざる所なりと。

絶対精神即ち大我の良心とも名づく（一）各個人の精神には仏性（一）具備せり。各個人の良心は（一）阿弥の命令に奉率すべき理性なり。

また個人理性即ち良心は絶対理性の個体に外ならず。

絶対理性の活動を大菩提と称すべくんば、吾人は自己の良心が大菩提の道德律に順じて自律的に其標準に率^{とよ}つて行動すべきを菩提心と名づく。

大菩提心は絶対理性に率つて自律的に道德秩序に順ぜざるべからず。（一）客観道德秩序は同じく阿弥の絶対理性なるが故に、この客観道德秩序に契^{かな}ふに、改革策進してこれに達すべき理性が有るなり。

内面的正義

既に絶対阿弥の理性の神聖態は一切の道德秩序即ち無上道心の一大原理にして、吾人の個人の理性

として、之に率^{したが}ふ行動を菩提心なりとは知りぬ。

個人の、阿弥の使命たる理性が、一切の行為を照鑑する知を正知見^{しよちけん}と云ふ。その衝動より一切の義務を（ ）する勢力之を正義、即ち正知見の義務なり。この正義即ち良心は無上道に向うべき過程の中に自己の三業^{さんごう}に於て善悪邪正の如実に判決をなす。

無上権威の神聖態、無規定に行はるゝ道德秩序の中に於て、正義としては、良心は憚りなく悪を破棄し善を賞す。

其正義を顕はさん為に、大經に、事相に約して、法藏の大願に、摂取選択として天人の善悪に悪を捨て善を選び取るべき願力を示されたり。

理に約して釈せば、法身如来蔵性が、所顕の一切衆生の精神に於て邪と悪とを破棄し正と善とを摂取すべきの理なり。斯の如きの理性は一切衆生精神自然の理性なり。

快哉。阿弥の正義、一切の主観内に、脱却せざるべからざる悪質をば悉く捨放し、一切の善を選択して摂取す。

其道德秩序は、他の一切と同しく、客観的秩序に致一することを得る同一軌轍の軌るべきが故に、

斯の如きの個々秩序は終局目的に致一するを得。經に此諸人等皆阿耨菩提を得ると。阿耨菩提は一道にして二あることなし。

仏性即ち良心は自ら道德律を立つるのみにあらず、無規律に對し其標準に順ふ。道心は無上道の司導として其規律に對して道德的行為をなす。自ら立法者として命令するのみならず、自ら道德行為の司法者となりて、常に自己の規律によりて裁判をなす。

良心は私を離れて如実の理法に率うて侵すべからざる判決をなし、而して理性に私なく偽なき已上は、阿弥の聖意にして、真理と適合したるものなり。

仏性即ち良心は、自己胸中の阿弥にして、私なき良心の聲は、内面の阿弥の聲にして、この理性は主客兩界を双照して、（ ）道德秩序に終局帰趣の光を与ふべきため、個人の守り本尊、阿弥の法王子、即ち指命として、吾人の頭脳に在り。

吾人は良心の指命に順はざるべからず。是絶対神聖態の個体なればなり。

選擇本願力

無上菩提とは絶対觀念が一切を開展して、終局目的に摂取して一切を活動せしむる勢力なりとは既に論じぬ。

客觀界道德秩序に（一）顕現したる阿弥の勢力、客觀界には社会制度と顕れ（二）娑婆即浄土の道德世界を建設する勢力なり。

道德の増進は阿弥の目的に（よる）故に、道德の為に力を尽す即ち衆生済度は阿弥の目的を増進せしむるなり。

無上菩提は一方客觀道德秩序として顕れ、終局目的に趣向する勢力なり。

阿弥の勢力無上菩提は絶対にして一切の処に道德秩序の安寧国を建設せんが為に、絶対精神の屬性なる一切慧と一切能は、選択本願力として、一切に含蓄して、この選択本願力によらざれば、一切の処に浄土を顕現すること能はず。

選択本願は是阿弥の正義として法界周遍せり。

選択本願と云ふも個人的局部的に非ず。絶対の本体に具する属性にして本然含有せる理性なり。阿弥の正義にして一切の客観道德の正善を選び、一切の客観界に於て、邪と惡とに於ては自然と淘汰して抽捨する所の精神的勢力なり。所謂国土の粗妙、天人の善惡に於て、一方を捨て善を選び取るべき正義の勢力は是絶対精神の属性、捨惡選善の正義の勢力を阿弥の本願と名づく。

阿弥の正義の勢力は一切処に周遍して、常に一切を開展して、衆生精神の惡を捨て善を開展せしめて、終局目的に摂取して自己の勢力に活動せしむ。

道德世界の浄土を莊嚴せんには、必ず選択本願、捨惡選善の正義の法則によらざるべからず。

絶対阿弥の本願力は一切に周遍し、世界に含蓄せる阿弥の本願（ ）正義の流行は、善は光明惡は闇黒なれば、惡は一時は盛（ ）ても必ず善の光には照破せらるべき（ ）惡は消極にして積極なる善の光明には照破せらるべし。菩提即ち道德の障害をなすものは雲の如く一時は覆ふべくも必ず消散すべく、惡は自己の目的と（ ）善を莊嚴する器具に過ぎず（ ）惡は脱却せざるべからず。

捨惡取善の正義の阿弥の勢能によらざれば決して道德的浄土を建立すること能はず。

阿弥の正義は常恒に流行す。(一) 悪は黒闇にして捨てられ正善は光明(一) 然として明なり。
阿弥の正義行はるゝ処は理想の浄土顕現せざるなし。

無上菩提の選択本願力とは、一切慧の、悪を捨て善を顕すの客観的正義に外ならず。

正義は八正道の正知見が終局目的に三業さんごうを行動せしむる勢力なり。正義は正知見衝動よりすべての邪を捨て正に帰し悪を排除し善に進む勢力にして、正義によらざれば清浄国土を顕現する能はず。悪を捨てざれば微妙顕すなし。

又雌雄淘汰選択の自然力が物心二質に含蓄せることも、阿弥の選択の勢力に外ならず。是れ正義の(一) 阿弥の本質を顕現する所の自然力なり。

正義は是菩提の勢力にして、菩提即ち阿弥が客観道徳秩序のすべての障物物を排除して、客観道徳秩序即ち浄土を建設するの願力なり。

正知見と正義

個人の頭に、阿弥の使命たる理性の、一切の行為を照鑑する知あり、之を正知見と云ふ。その衝動より一切の義務行動をする勢力、之が正義。即ち正知見の義務なり。この正義即ち良心は無上道に向ふべき過程の中に、自己の三業に於て善悪邪正を判断して如実に判決をなす。無上權威の神聖態は、無規定に行はるゝ道徳秩序の中に於て、正義としては、良心は憚なく悪を破棄して善を賞す。

其の正義を顕はさんが為に、大經に事相に約して、法蔵の大願に、攝取選択、天人の善悪に悪を捨て善を選びとるべき願力を示されたり。

理に約して釈せば、法身如来藏性の、所顯の一切衆生の精神に於て、邪と悪とを破棄し正と善とを攝取すべきの理あり。斯の如きの理性は一切衆生の精神自然の理性なり。

阿弥の正義、一切の主觀に脱却せざるべからざる悪質をば悉く放捨して、一切の善を選択して攝取す。斯の如くの正義にあらざるよりは主觀界の正義顯彰するによしなし。何に依てか阿弥の目的を彰すことを得ん。

仏教善悪因果の理に於て善に福を得悪には苦報あり。然れども有為の報を望む如きは主我幸福主義にして、未だ阿弥の関せざるものなれば論ずるに足らず。阿弥を離れたる者は善悪共に悪なり。主我

と幸福主義とは不正義として排除せざるべからず。

已に阿弥の神聖態の命令の中に、良心が即ち正知見の義務として、思惟し、言語し、動作し、精神生活に於ても、阿弥の捨てたる一切の悪を捨て、選みたる一切の善を修す。

阿弥無量の大願を以て悪を棄て善を顕すこと譬へば宝石を磨きて垢穢を脱却して真価を顕はすが如し。吾人は阿弥の個体として阿弥の終局目的に向つて彼に達せんと欲す。主我の悪は脱却せざるべからず。

吾人は阿弥の指命の下に正義の旗を立て自己胸中の悪魔との健闘に勝利を望む。たとえ肉を犠牲にしても阿弥の目的に協力せんことを願望す。日々の精神生活の中に於て正知見の判決は審諦にして善の行為には満足を感じ不善の行為には良心の罰を免るゝこと能はず。故に善悪の果報として念々に良心の賞罰をうく。最終の判決孰れか免るゝことを得ん。若し良心の賞罰をさえ感ぜざる如きもの未だ宗教の範囲に入るべきに非ず。

善導大師の真実心の釈に、

「一切衆生の身口意業に修する所の解行、必ず真実心中に作すべし。外に賢善精進の相を現じて内

に虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性侵難く、事蛇蝎に同じきは、三業を起すと雖名づけて雑毒の善と爲し、亦虚仮の行と名づけて真実の業と名づけず。(中略)

阿弥陀仏の因中の菩薩の行を行じたまひし時乃至一念一刹那も三業に修する所皆是真実心中に作し凡べて施爲趣求する所亦皆真実なり。(中略)

真実心の中に自他の諸悪及穢国等を制捨して、行住坐臥に一切の菩薩の諸悪を制捨するに同じく、我も亦是の如くならんと想ふ。(中略)

又深信とは仰ぎ願くは一切の行者等、一心に仏語を信じて身命を顧みず決定して依行せよ。仏の捨てしめたまふものは即ち捨て、仏の行ぜしめたまふものは即ち行じ、仏の去らしめたまふ処をば即ち去れ。是を仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、是を仏願に随順すと名づけ、是を眞の仏弟子と名づく。」

正義とは知見の義務感情公平なる判決にて自ら判つべし。然るに自己の良心なほ忍ばざる行爲も、阿弥は恩寵をもて赦すと謂ふが如きは、正義と云ふべからず。若し是を赦さば、不正の罪仏陀の罪人たるを免れず。内心に於て道德の命令的性あるが故に神聖態と觀ぜられ、良心の制裁の聲に正義と現

はるゝなり。導師の二河白道の白道は是純正の正知見正義なり。

大經に智慧無碍にして、虚偽諛曲こぎやてんごくの心有ることなく、勇猛精進にして志願倦むことなく、専ら清白の法を求めて群生ぐんじゅうを惠利すと。

法界等流の恩寵

吾人は本来仏性具有し、本覚真心あり、絶対阿弥の個体に外ならず。

斯く仏性を賦与して一切を終局目的に帰趣せしめんとの計画の理性あるも、罪惡に亡びたる吾人は自己の力にて解脱すること能はず。然るに阿弥は一切を解脱し靈化せんとして之を摂取し、自己に協力して活動せしむるは終局に帰趣せしむる恩寵なり。

信論に「真如薰習に二義あり。一自体相薰習二に用薰習。自体相薰習とは、衆生無始来無漏法を具す、備に不思議の業ありて境界の性を作す、此二義に依て恒常に薰習す。薰習力ある故に能く衆生をして生死を厭ひ涅槃を樂求せしむ。自ら己身に真如法有るを信じ発心修行す」と。又

真如は本一なれども無明等の煩惱ありて差別す。仏法に因有り縁有り因縁具足して乃ち成弁を得。木中の火性は是木の正因にして若し人の知もなく方便を仮らずしては能自ら木を焼くこと有ることなし。衆生も爾り。正因薰習の力ありと雖も若し諸仏等の知識に逢うて縁とせざれば自ら煩惱を断じ涅槃に入ることとは有り得ることなし。たとへ外縁の力あるも内の淨法の薰習力あらずんばまた解脱すること能はず。若因縁具足する者は諸仏等の為に慈悲願護せらるゝが故に、志を発し善を修して涅槃に向ふ。

用薰習とは衆生外縁の力、これに無量の義あり。一に差別縁。二に平等縁。差別縁とは諸仏等の知識に依て発心求道し、或は眷屬又は親屬知識等乃至一切の所作無量の行縁等によりて善根を増長せしめ利益を得る等。平等縁とは諸仏等皆衆生を度脱せんと欲し自然に薰習して常恒に捨てず。同体智力を以ての故に見聞に應じて作業を現す。所謂衆生三昧に依て平等に仏を見ることを得るが故に」と。
法界等流。

客觀界に流布せる宗教は一切人類の中に行はる。其内面に実在せる恩寵が互に相伝へ展転して、因縁相係の中に、所謂木に火の相展転して伝ふが如し。相互の刺激益々宗教意識を顕して伝播す。因縁

相待て恩寵を喚起しまた開展し解脫靈化す。

楞伽に説くが如く、十方国土法報応変化皆從_二阿弥陀国_一出。

阿弥一切を度せんが為に、真より用を起して、或は如来因地の発願を示して、大慈悲を發し、諸の波羅密を修して、衆生を摂化す等。衆生界を度せんが為に、尽未來際、一切衆生を視ること自己の如く、亦衆生の相を取らず、實に一切衆生も自己も真如平等にして、別異なきを知るが故に。

或は報応二身の果滿の妙色身を現じて、無量の相好、所住の依報、数々の莊嚴を示現して、無辺無碍にして、其所心に随つて常に能く住持して毀せず失せず。

十方無量の諸仏菩薩等、無量の法報応の身を現して、各々差別、皆分別なく（一）、此れ心識の能く識る所に非ず。真如自在の（一）用の故に。

真如即ち阿弥無碍の妙用なり。円滿無碍の絶対には因果不二の中に於て或は因分菩薩等の身を顕し大願を發して、尽未來際菩薩の（一）を捨てず。一方には久遠劫已來実成の妙法身を示し、悉く隨縁妙用無方（一）、真より用を起して、広く群生を利す。十方法界常恒に断えず。大悲の故に隨縁、大智を以て妙用とす。

又不壞假名常度_ニ衆生_一、云_ニ隨緣_一。了知_ニ衆生性空_一、實無_ニ度者_一、云_ニ妙用_一。又理即事故、名_ニ隨緣_一。事即理故名_ニ妙用_一。又真不違俗故妙用。又依_レ本起_レ末故隨緣、撰_レ末歸_レ本故妙用。良以法無_ニ分齊_一、起必同時、真理不_レ礙_ニ万差_一、顯應無_レ非_ニ一際_一。

法藏菩薩の大願

事に約して云へば、本体の妙用を顯示せんが為に、法藏菩薩と現じて、衆生を度せんが為に大願を發して、「吾誓得_レ仏、普行此願、一切恐懼、為作大安。令我作_レ仏、国土第一、其衆奇妙、道場超絶。我当に一切を哀愍度脱すべし、假令身を諸の苦毒の中におくとも、我行は精進にして忍んで終_ニに悔ひざらん_一と。

菩薩の衆生を度せんが為に、十方一切処等微塵許りも身を（捨）てざる処なし。無量の大願、無限の大行を以て一切を度す。

理に約して釈せば、法身藏性は、自己の理性_{りしよ}より、一切衆生を終局に帰趣せんがために、衆生の仏

性を開展して、理性に隨順して、阿弥の中に活動せしむべき理性にして、極樂は法性真如の理性。法藏は法身藏性にして、藏性を開展して無限の光壽を顯示す。一切衆生は自己身内の一切なれば、常に開展して終局目的に向はしむ。

大願とは真如の勢力にして、一切能と一切慧とが一切を度脱する勢力を大願と云ふ。

本願力即ち神的エネルギー

阿弥の本願力とは即ち絶対真心即ち本質の屬性たる一切慧と一切能との性能に外ならず。

事に約して云はば、法藏の發心、衆生攝取の（ ）神話の如きも。

理に約して云はば、法藏即ち法身如来藏、絶対無限の実体に無辺の性徳を包含し、此一大実体より世界万類を摂取する一大勢力を与ふ。是を本願力と云ふ。無限の如来藏性の勢力なれば、之に一切の衆生の精神を開展して高等に靈化し一切をして自己の神聖に同化個人に神的活動の元（素）を与ふる。一大精神的勢力を本願力と云ふ。其勢力は十方無限、一切の処として周遍せざる処なし。之を經に、

「彼の仏光明無量にして十方の国を照して障礙する所無し」と云ふ。

若し此性能にして法界に周遍せざらば、一切衆生の信仰に与ふる素質あることなし。此の大勢力は絶対無限の阿弥の遍活動力に外ならず。一切衆生の菩提心即ち神的活動信仰の実行は其本源に帰せざるべからず。

阿弥は絶対無限の遍活動の一大元素なり。之を今卑近なる物に例せば、鳥飛んで天に翔り音を發し魚の淵に躍るより人類の精神生活をなすに至るも、植物生活動物生活等は実に微細に至つて蠢々たる蠢動の類も細々たる植物にしても、之等の生活の要素を与ふるに非れば決して生活々動すべきものに非ず。而して此動物生活の要素たる食物は或は直接に、或は間接に植物に依らざるべからず。故に動物生活の勢力を与ふるのは植物と云はざるべからず。植物は何をもて動物の食物を作り得るやと云はば、根より吸収したる水分と葉より吸収したる炭酸瓦斯とを日光の作用により同化作用をなして澱粉を作り、又動物の食物の要素たる蛋白質を作る。この炭酸水窒（硫）の五元素より成り、炭素は葉より入り窒素と硫素とは根より吸収せられ（ ）日光作用を受けざるなし。植物の作りたる澱粉蛋白質は動物の食となる（ ）。エネルギーを与ふ。植物が同化作用をなすも一に光線の力によるを以て、

動物の有する力もつまり太陽光線の有するエネルギーの変化に外ならず。其他風の動揺水の運轉蒸気電気の光と音響を發する等一切の色声香味触の元動悉く太陽のエネルギーを根元とする故にそれに帰せざるべからず。若し太陽のエネルギーの供養にして欠くる時は地球は枯渴して終には活動なき死塊に過ぎざるべし。

物的活動の一大原氣は太陽に歸すべきが如く、精神態の一大原動力は即ち絶対真心態阿彌の勢力にあり。

天然教に、天の命之を性と云ひ性に率しちがふ之を道と云ふ。此天命を天然的に認めずして、超然たる一大精神態として、

この絶対真神に一切慧と一切能との屬性ありて、この慧と能との性能によりて、衆生心は開展せられて、この神的觀念によりて神的活動するは、悉く阿彌の一大勢力より一切の個々に受けたるエネルギーに外ならず。

全宇宙は物的流行のみにあらずして、最深微妙の觀念的神的勢力の流行せるは、是高等なる宗教精神生活の原動力なり。

物的勢力の外に神的流行を認むることなきは自然教及び天然科学と唯物論者の執する処なれども、之等は何れも超天然を窺ふべき心機開展せざる意識にして、天然科学に於てはいかに精妙にても宗教としては幼稚なる意識たるを免れず。

阿弥陀經に十方の国を照して障碍する処無しとは即ち是れ真心態の屬性たる一切慧と能との勢力をもて一切衆生の心機を開展し靈化して活動せしむる勢力なり。

宗教的生活には若くしは間接に若しくは直接にこの神的エネルギーの大气中の生活なり。間接とは社会に流れつゝある客観的の信仰即ち神的行為等、或は聖經及び法規等の流行せるはこれ此要素を与ふる精神的法規に外ならず。

然れども聖經等はこの主観的勢力を惹起する所の助成規定とはなりうるも是全く生ける勢力に非ず全く活ける勢力は法界に周遍せる本然清浄にして循業隨縁じゆんごふじゆんによつて発動すべき勢力なり。

此一大勢力は、物的の太陽より一切に与ふる如き物的顯著に非る精神態の微妙甚深の神聖態智慧態勢力にして、観念的内容に於て之に接し之に感応すべき本質なれば、天然の意識には感ずる能はず。

光明の体相

「彼の仏の光明無量にして十方の国土を照すに障碍する所なきが故に阿弥陀と名づく」と。是文を釈するに光明の体と相とを以てし且つ譬喩を以て其性能を解釈せん。

先づ彼の光明を認識し此光明に関係し致一せんと欲せば其本質を知らざるべからず。問、彼仏光明十方に周遍す人何故ぞ之を認識せざるや。答。吾大乘仏教は最高等に進（化）したる精神的宗教にして随つて客体（ ）は非物質的即ち精神的（ ）其本体及屬性（ ）等物質的現象界に求むべからず。阿弥の光明遍く十方一切の処に遍在す。物質的光明に非ず。即ち衆生の精神に対するものの觀念内容に於て知見することを得べし。故に阿弥の身相光明を知見せんには、神的觀念に凝神し三昧の内に於て機能致一的に観見することを得べし。

經に「如来は是れ法界身、一切衆生心想の中に入り給ふ」と。法界とは是感覺界に非ずして人の意識に対する法界なり。故に彼の仏の光明遍く十方世界を照して念仏の衆生を攝取する、とは仏を念ず

る内容なり。衆生の精神内容を照して摂取して捨てず。

光明の本体は真神態にして、また般若と解脱、即ち一切慧と一切能、との屬性を以て衆生を照すなり。

光明の功德

問。光明の本質は非物質的にして精神態にして絶対無限なることを知りぬ。然らば衆生この光明によりていかなる利益を蒙るや。

答。衆生此光明によりて仏知見開示して、仏の正道に悟入す。今暫く衆生の（一）三機能に対して蒙る（一）功德を説かば、

人の知力には、仏知見として、此法界遍照の心光によつて、人の知力開展して、法界に遍く実在せる阿弥陀仏の相好光明端正無比にして、円光徹照するを觀じ、また彼の七宝莊嚴の清淨国土宛然として、明鏡をもて自己の面像を觀るが如し。また弥陀の仏智、不思議智、不可称智、大乘広智、無等無倫最上勝智。及び仏心大慈悲。即ち無縁の慈悲法界に周遍することを諦かに觀見することを得べし。また仏は是れ法界身、十方法界に周遍することを觀ずべし。

次に心情には苦毒罪過の感情解脱して、靈福を感じ、阿弥の真我の中に融合し安立して、平和寂靜の状態となり、又情操轉化し、即ち煩惱即菩提、生死即涅槃。従来の天然の主我は轉化して真我中の生命となり、阿弥即ち無限光壽の中の生命となりて神的活動するに至るべし。(へ) 更生の後は、天然の生命の意象は一転して、全く昨日の主我に非ざるを覺らん。意志は轉化して菩提心となりて、鞏固なる道徳態となりて活動するに至る。

大藏法(聚)に三身を譬えて、法身は虚空の如くに遍し、報身は日光の如くに遍し、応身は日光の物を化育する如くに遍すと。

今、光明の機能を譬へんに、日光の波動眼球の網膜に伝はり視神経を刺戟して頭腦に伝はりて視覚を起す。色の区別をなすは単位時間に視神経を刺戟する波動の数による。単位時間に最多の振動をなすは紫にして藍青緑黄等の色は振動を減少し赤は最少し。白色線は此振動数を(共に)すと。太陽の輻射線中には白色光線の外に熱線及化学線あり。熱線は熱気をもて万物を温め、化学線は物を変化せしむる化学作用強く、たとへば写真の種板に塗りたる薬品に変化を与ふる如し。

日の光熱化学線は物質的にして能く物質界の万物に作用す。阿弥の円満報身の光明は即ち物質的に

非ずして法界を遍照し精神界を照す。物質と精神と其主質は天淵なりと雖其形式相類す。

日光の光線の明を与ふるに同じく、阿弥の眞神態光明即ち一切慧の光は、衆生の精神を開展して、啓示の光として法界の事（ ）を照して衆生の精神に知見を与ふ。

神的熱線は精神の感情的に新鮮なる（ ）靈福を与へて神的活動せしめ、神に対する感情は温暖と熱中とを起し、神と融和する和樂専念の熱情を發す。

恩寵に縁る蒸氣力を起して信仰の活動をなすは恩寵に対する觀念によりて感情を感動せしむる神的熱線に外ならず。

神的化学線は衆生の信仰の意志をしてすべての天然的情操野卑の意象を転して神聖的靈化の変化を与ふ。即ち人の天然意象は自我幸福主義にして娑婆執着利己主義たるを免れず。阿弥の恩寵によりて意志の悪素質脱却して、常に注意して、阿弥の神的觀念たる無上道德に向つて利己を打破し、漸次に進化せば神聖靈化す。之を無上道德心と名づく。この客体の恩寵、化学線に比すべし。

三徳と菩提心

法身、般若、解脱の三徳、処として融化せざるなく、解脱の徳は万有生起の一切衆生の意志を解脱靈化して靈的行動せしむ。これ衆生の意志に有する苦悩と罪惡を脱して平和安寧としました道德的行為たらしむる原動力なり。

宇宙大道は自然界に行はれ、天命之を性と曰ひ性に率ふ之を道と曰ふ。宇宙大道を仏教にて阿耨多羅三藐三菩提と為す。然るに衆生は曾て六道に輪廻し、意志は我意と野卑なる自我幸福主義、其意向は衆生法に随順して仏法に背き、闇黒に向ひて光明にそむきたり。こゝに於て如来応身を斯の土に示現し、世の光明となりて衆生に終局の帰趣を教ゆ。如来は人の意志に無上菩提心を発さしむ、即ち願作仏心なり。願作仏心と願度生心。願度生心とは一切衆生と共に安樂國に更生するにあり。

総じて菩提心を成ぜしむる如来の方は神聖と正義と恩寵とにあり。

神聖の光を意志に加ふる時は、神聖は真理にして衆生の実行意志を照して、自律的に道德行為をな

さしむ。如来の神聖は実践を照す智慧にして、如来は智慧の光を以て常恒に儼臨まし／＼て吾人の行為を指導したまふことを信知する時は、其照鑑の前に自ら正見と為る。故に其向ふ処自から終局の無上道に到達す。

正義は、公平無私、如来の聖意に随順して正道を實踐するにあり。正義は一切の悪煩惱を排して正善に向つて行動す。悪の根本は我にあり。故に私慾の我を捨て如来の聖意に随ふことは一切の悪を捨て一切の正善に順ふの義なり。正善とは六度八正道十善等なり。私を献^{けん}げて聖意に順ふ時は、自から六度八正十善等は具はるなり。全く如来の正義の加はる時は、如来の聖意を實現せんが為に靈的行為をなすに至る。

恩寵は、一度光に背き知見の眼を失ひ罪惡となり苦悩に沈淪するを慰^{なぐさ}み、大悲の本願光明名号を以て、衆生の無明を照破して知見を与へ、煩惱を脱して聖靈的意志とし、苦悩を抜きて勝妙真實の樂を与ふ。斯如来慈悲の光明によりて心靈復活し心的生命と為るが故に、其恩を感じ感謝の念よりまた靈的の感謝に活動するが故に、自から公明正大の心となりて、如来の恩に報ひ、復活せられたる義務として靈的活動をなすに至る。之を願作^{ねんさく}仏心と為す。次に願度衆生心とは自己が如来の恩寵によりて無

明罪惡より解脱靈化せられしが故に、自己もまた仏恩に報ひんが為に、同胞たる衆生に及ぼし、自己の救靈せられし如く他人もまた救靈せられんことを期す。また如来の正義を被むるが故に、公明正大にして自他の差別なし。斯の正義は自他平等の意志なり。自己の聖ホギめられし如くに他を聖む。

尽未来際斯の無上道心を以て如来の分身たる本務を果さんと願ふ。之を願度生心と為す。

靈徳不思議の力

吾人の常恒に内觀的本尊と為つて吾人の信仰の対象として常に吾人の宗教心を導き給ふ者は宇宙唯一弥陀尊にて在ます。吾人が宇宙の中心本尊の無限の光にて永恒の生命なる無上尊なり。

如来は神聖と正義と恩寵との靈徳を以て常に吾人の頂を照らし給ふ。神聖に対して吾人は真に威神光明侵すべからざる感あり。是は吾人の尊崇性を照して帰命頂礼せしめ給ふ威力あることを信ず。吾人は神聖なる智慧の照鑑の光にて正知見を与へられて、如来の聖意を以て吾人の意志とし、吾人の神聖の光明の中の行為は如来に向うて、真善美の極致に向つて進趣することを得。

正義は如来の聖意は悪を捨て善を選び邪を捨て正に帰し非を避け善に就かしむる勢力なり。故に吾人が此靈性に照らさるゝ時は自然と聖意の如くに如実に如来の聖道に進むことを得。

恩寵としての如来は慈父や慈母のその子に於ける如く無上の慈悲を以て吾人を愛撫し給ふ。此靈徳に對する時は実に有りがたく感じられまいたとあたゝかなる慈愛に抱擁せられて自づと如来の愛に融合す。此靈徳は吾人の心靈を愛育し給ふ力なり。

我等が信仰する如来は吾人が最も尊崇すべくまた最も愛慕すべき人格的神尊なり。如来正義（威神の光）を以て吾人に儼臨し給ふ方より見れば最も尊敬すべく実に如来は神聖にして侵すべからず。吾人は如来の神聖なる光の宇宙間一切の尊き格上よりも尊く絶對的に尊きを感じず。こゝに於て吾等が眞面目なる宗教心は絶對的神尊の如来に對する尊崇心に依つて成立す。

如来は我らが最も愛慕すべき人格尊なりと感ず。如来は恩寵を以て我等衆生を愛し給ふこと母の子を思ふよりも甚だし、我等が心靈の仏性は元より仏の子なり。また仏の子たる靈性は只如来を愛慕し憶念する信仰に由つてのみ育つなり。

恩寵發得

恩寵發得とは三昧發得ともまた靈性開展とも聖靈感得とも種々に名けらるゝも、歸する処神人合一の實致にして靈の生命に入るの事實なり。如来の恩寵によりて自己の靈性を發き心光を自己の物とするにあり。假令宗教の意義を理解するとも全く發得するに至らざれば活ける信仰と云ふ可からず。

恩寵發得の因縁は自己の信仰を因とし如来の恩寵を縁とし因縁成熟する処に於て初めて恩寵を發得す。喩ば木は燃て火を發す可き性を有するも、或は他の木と木と摩擦して火を發するか亦は他の木に燃つゝある火より伝はりて自己火を發するかの如し。就ては恩寵發得の規定に先づ因なる自己の性の信仰と如来の恩寵の關係を研究せんに、

人の性には如来の恩寵を獲得すべき性が本能に具備せり。如来の光明の縁によれば受け得らるゝ性を因と爲す。また宇宙の法界には人の信仰に対して絶対なる力を与ふべき勢力あり。之を恩寵といふ。宗教上の靈的關係を更に喩を以て例せば、人に目あり外に日光あり、目と日光の因縁によりて能

く物を見うるが如しとの華嚴の説の如く、仮令日光は常より照せども目なき時は視ること能はず。自然界の太陽に例ふべき心靈界の如来の光明は常恒に照耀しつゝあるも、信仰の眼まだ開けざれば此靈的の光明を意識するに由なし。信仰の心眼開けて如来靈光の中に精神生活を為すに至れば、すべて天地万物若しは自然界の方面より靈界に通じて、現在より永遠に貫きて、悉く如来の恩寵にあらざるは無きことを実感するに至る、これを恩寵の發得と為す。

恩寵發得の規定に因と縁との理を明さば、

因即ち人の信仰心に如来の光明を得らるべき性ありて此の因性に二種あり、遠因と近因なり。遠因とは一切衆生の本性本一大法身の分子なれば、原始的生物の源より靈性の伏能を具有すと云も敢て不可ならざらん。之を仏教に一切衆生悉有仏性と示さる。此靈性具備すれども潜伏態にして直に顕動態を為すにあらず。衆生の遠因仏性は平等なるも、この仏性を開發す可き如来の恩寵を發得するには精神が高等に進化しての後になるべし。

近因とは人の靈性が豊富にして如来の恩寵を發得するに適當なると不適當なるとの二素質あり。靈性豊富即ち宗教的天才とも云ふべきものは自然に宗教信仰に感じ易く、亦自から天の一方に靈光を憧

懺し靈的信念の自己より衝動するものなり。或はまた一向鈍愚にしていかに他より施すも信仰の起らざる機類あり。また世智弁聰にて世智は通常に超えて利巧なるも靈的信仰には心に感じ難きあり。

此ら其稟性の殊なるは、或は仏教にて宿因と云ひ、世間にては遺伝素質と云ふ。宿因と見做すも遺伝素質と云ふも、人の性に宗教に適不適あるは事実なり。各自の先天的に宗教的素質の豊否はあれども、人間として全く遺伝素質的信心性能無きはあらざるべし。近因なる祖先来の遺伝恩寵が因として、人には宗教の信仰を発得出来るものとし之を因と為す。

如来の恩寵、即ち一大靈力、また本願力とも撰取の大光明とも云ふ。名は種々にあれども、要する処人の信仰心を救^{たす}けて、啓示し、悟らせ、苦を抜き樂を与え、悪をさけ、善に向はしめ、闇黒より光明に、不満より満足に、不靈より靈的に、卑劣より高尚に、有限より無限に、人の信仰を満たしむる靈力の存在、当人の経験に訴へて証する処なり。之を如来の恩寵と為す。教祖釈尊の靈に満てる精神状態、聖法然の円満なる靈的生命、彼の聖者等の信仰心に満ちしむるもの即ち是如来の恩寵なりまた心光なり。

例ば月には光なし然れども太陽の光が反映して皎々として照す如く、彼の聖者の人格に如来の靈光

反映して心靈皎々として靈光を放ちしに非ずや。宇宙に斯の如きの一大靈光また恩寵の赫々として照耀せるは、実に百倍の日月の雙照よりは明かなり。斯の如きの靈光は常恒に照るも、之を知りて斯靈光を以て自己の生命として靈的生活するには、この光明の靈力を被りて靈性發得するにあらざれば悉く自己の靈と為す能はず。

靈光を受くる人の信仰即ち因に二因ある如く、大靈力の恩寵もまた三縁あり。大より云はゞ、一無縁。二法縁。三衆生縁の慈なり。初め無縁の慈とは、本有法身常恒無量光より無始無終常恒に十方界に照耀する永遠のロゴス、十方三世に亘りて微毫も其の靈力の満ちざる限なし。經に「彼仏光明無量にして十方の国を照すに障碍する処なし故に阿弥陀と名く。」また「無量壽仏の光明顯赫にして十方を照耀す諸仏の国土に聞へざる処なし云々」と。

如来第一義の恩寵は絶対にして規定なく一切の処とて縁ぜざる処なし故に無縁の慈と云ふ。無縁とは規定なく自然に一切に縁ぜざる処なき故に無縁と云ふ。積極的無規定に一切に縁ずる処なり。

如来第一義絶対本有の一大靈力法界に充満すれども、因縁に規定せらるゝ世界の方面に約束せらるゝ衆生の為には、第二義の規定によりて被らしめざれば恩寵を得ること能はず。そこで絶対本有の無

量光より世界衆生の為に、遠くば法蔵因位の大願を起し迷子を憐む慈悲より、因果の規定に約束せられて六道生死に流転する衆生の為には、同く因果の法則に準じ、衆生の贖罪に無量劫の苦患を受けても忍んで悔ひじとの願成就して、正覚果満の十劫正覚と顕はれしは、即ち衆生の為の報仏として光明十方を照し、其本願の名号によりて、如来をたより恩寵を被むる者は悉く摂取同化の縁に預らざるはなし。

近くは釈迦と現はれて、如来慈父の恩寵を衆生に示さんため仏法を開きて、大悲の恩寵を衆生に教ゆ。

十劫正覚のミダ、伽耶成道の釈迦の仏法は此の因果的にある衆生を因果にかなふ法則を以て衆生を救済するの恩寵なり。此の世に仏法として如来慈悲の教として世に行はるゝは即ち法縁の慈悲なり。

法縁の慈悲として顕はるゝも、其本体は同じく絶対無縁の一大靈力の流行力をミダ釈迦として世に出でゝ衆生を摂取して慈父に帰せしめん為の法縁なり。第一義は第一義より劣等なりと謂ふべからず。如来には第一義と二義との別あるに非ずして、第一義のみでは衆生に縁すること能はず、依て因果の法則にかなふ理を以て衆生に慈悲を被らしむるのみ。

第三、衆生縁とは、第一絶対の恩寵が因果律の世界即ち人間界に人仏出でて、仏法といふ法縁を以て衆生を授けし、此法によりて初めて慈悲如来の恩寵を被らしむる法は世に行はれるも、個人個人は衆生縁によりて恩寵を発得するに至る。之れは仏法は世に流布すとも或は家庭に於て父母親友の誘導により、または教会に於て知識の親化によりて、教へられ感得せられて自己に恩寵を発得す。之衆生縁の恩寵と云ふ。衆生縁亦た一大恩寵が原動力なれども、仏法として代々世に行はれるものが展転して甲より乙に父より子に師より資すけに伝燈して世に行はるゝなり。甲の燭火を乙に点じて展転することなり。然れども火の本体は宇宙に存在する火大なり、その如くに絶対本然の一大靈力たる恩寵は常恒不變なれども、衆生の信仰心に感伝して、恩寵が其人の心靈的生命となりて、光明的の生活をなすには因縁成熟するにあらざれば発得し難し。

恩寵發得の二縁

宗教に正義の宗教と慈悲の宗教の二種あり。西洋にても猶太教と基督教、甲は正義により乙は神の

慈愛に本づき、甲は神の戒律を守り乙は神の慈愛を本とするが如し。

仏教もまた此と同じく釈迦教は戒律を基本とし、弥陀教は信愛を宗とす。

仏教戒律主義は、此土出世の釈尊より波羅提木叉ばらたきむしや即ち戒体が師より資でに伝はり、之を如来の法身とし、假令釈尊入滅すとも、法身の戒体は常住にして展転して行はれ法身の慧命は竟に滅せずと。波羅提木叉即ち戒体法身は真実に発得して初めて真実の活ける慧命となるなり。活ける仏者仏徒なり仏弟子なり。たとひ三衣身を装ふも戒体法身発得するに非ざれば眞の仏徒に非ず。

戒に大小ありと雖も、戒定慧を以て慧命とせざるなし。戒を得れば定慧も発得す。故に戒体法身の発得は、基督教の聖靈感得、禪の見性と同じく、靈の眞生命に入るの機関なり。

戒体の発得に二規定あり。律の文に云く一には伝燈相統発得と二に自誓得戒となり。伝燈師に依りて相統するは即ち甲の火を乙の燭に伝ふ如くに展転伝燈して相統す。然るに此規定にも資弟でしの機已に熟して師の靈格に存在する靈活生命を資弟に伝燈す。故に師は親切篤実にして資の戒体を発得せしむべし。然らざれば発得し易すからず。

次に自誓得戒とは、若し百里千里の中に伝燈の師なき時、自から一心に誓を起して若七日乃至七々

日若は一年三年にじよまう加行修得して、或は仏の相好を感じし又は花を見光明を感じる等の靈感を得れば、之自ら誓て戒体を発得すべし。

自誓、伝燈、発得何れにても、全く戒体発得して眞の靈的生命となる時は功に於て同じきものと爲る。

慈悲を宗とする信仰の恩寵発得にまた二類あり。一は伝燈的発得。二は自修的発得。伝燈的発得は師友善智識の指導の下に漸々に信念を養はる。

人の信念を養ふ恩寵が靈を養ふことを小児を養ふに例せば、小児の体を養ふ養分原料は日本なれば米または肉類等よりの慈養を摂取して此肉体を養ふ。然れども小児には穀肉等が眞に自から消化するの營養機能未だ発達せず、故に母が食して嬰兒の消化に適ふべき乳汁として与ふ。小児は乳に由て養はる。然れども或時期に至れば自から穀肉等の養分を直接に摂取して營養と爲すことをうる如し。

靈的発得の規定もまた之と同じく、師友善智識は常に自から恩寵の靈飡を享受しまた信念の生命を保持す。自己の靈的信念を初心の求道者に感伝す。其の成熟に遅速の異ありと雖も、求道者の至誠熱誠と師友の親切と相待つて全からば、母の乳に依て養はるる児の如くに、靈的生命を發得することを

得可し。此の感伝の規定に於て注意す可き事は、若し師たる者単に言語文字の解説を伝ふ時は資もまた唯言説の領解のみを以てついに靈活生命ある信念を發得すること能はず、故に求道者は名師を撰ぶの要あり。

斯の如きの規定によりて發得するを伝燈的發得と云ふ。

次に自修發得とは、自誓得戒と同じく、伝燈の師を待たず自修的に如来の恩寵を發得す。これは宗教的天才の如きは、自己に靈的伏能より萌發せんとしつゝある資にて、善導大師の如き、浄土の変相を見て猛然として奮起し、若し神（ミカミ）を斯る淨域に遷さざれば何に由つてか生死を脱せんと、即ち浄土の変相を見て導師の心には欽慕の念禁じ難く、如来の聖言は忘れ難く、自己内心にミダを念じ憶念常に止まず、ついに自から發得したるが如く、宗教的天才はたとひ外縁を藉（か）ると雖も師友の指導を待たずして自から發得するものなり。また自修發得と云ふも摧勵勉力せざるべからず。

自修的發得の機類は喩ば木と木と相摩擦して木より火を發するが如く、他受的伝燈的發得の人は他の火を自己に伝ふるが如し。何にしても全く恩寵が自己の生命となりて、靈的生活に至らば足りぬべし。

現在我と理想我

世界自身は因果に規定せらる。よりて真に畢竟の心情の安立処を求めば、宇宙統一的根底たる絶対永恒なる如来に求めざるべからず。

罪惡は主我を根本とす、主我自ら主我を脱すべきに非ず。

自己の最根底たる自己の心靈即理想我、天然機制の我を超越し其最根底たる絶対の觀念中に真の我を發見す。

現在我と理想我。理想我は心靈にして、一大心靈即ち真我と一致せる自己の心靈我は即ち大我、之を真我とす。

機制我は自由を得ず。因果に約束せらる。理想我は超然として高く機制を離れたるが故に、天則の機定と世界の束縛を離れて、生死の表に出て相待なる善惡を超えて絶対なる真善なり。如来真我に相應するが故に。

歸命と融合

心情信仰は解脱の恩寵と冥合一致し、恩寵の獲得は即信仰の発得、心情的機能一致、入我々入、最深中心の真髓なり。

如來に投婦没入して、現在我を消極的に没入するを歸命と云ふ。已に歸命しぬる時は機制なきにあらざるも、罪惡の根本たる主我已に歸命する時は、機制の罪惡なきにあらざるも、主既に歸す、その眷屬何ぞ其命を奉ぜざらん。

如來の恩寵と心情と相應投合す、即ち融合なり。融合の状態神秘、融合は大我小我入我我入、三昧致一の状態。水を海中に投ずるが如く風中に柝を鼓するが如し。

入我我入

我の根本的本源は何ぞや。自己は身体と精神と二要素より成立す。わがこの身体を組織する元素は那辺より来りしものぞ。即ち諸々の元素は宇宙を離れて従来せる処なし。然れば此身体を造る原料は宇宙なりとすれば、宇宙は物質元素の親なり。人に具有の精神に於てもまた然り。宇宙を離れて依り来る処なし。由りて観れば宇宙は心身両方の原素にして、産出されし衆生個々の我を小我とすれば宇宙は一大精神なり。

密教には物心二素を合して、全体を人格に表して色心一体の大日如来と曰ふ。即ち宇宙は即ちは一切智と一切能即ち知力と意志。大日如来は大我なり。衆生は大日の一分なれば悉く是小大日なりといふべし。行者三密加持の感応によりて如来の三密と衆生の三業と相応する時、行者の我は如来の大我に入り如来の大我は衆生の我に入り此彼融合し、自己の心大我に冥合する時は、宇宙大なる我には彼此の相貌なく絶対無限にして蕩々乎とし涯畔なし春和融朗。

今、神秘融合の心の状態は、たゞ形式的に、大自觀念の光明中に、觀念的自観として、精神的形式に於て、能観と所観と一致するのみにあらず、内容に於て如来の大我と小我との神秘の感情的融合の状態は暖かに麗はしく、春日の長閑なる和氣に囲まれる暖温なる心情蕩々乎として言ふべからず。

宇宙の本体

如来は他人ではなく、我等が本覺の父である。精神を絶対的に宇宙の靈に、活ける父としての如来の中に投じ、暖かなる慈愛に暖められ、融込て卵の孵化する如くに、始めて心靈覺醒して見れば、宇宙の本体は唯の自然ではなくて、実に大靈の活ける最も慈愛に富めるミオヤである。全くこゝに至て觀れば、假令此形体は小さくも、心靈の内面に於て大なる如来毘盧遮那びろしやなの光明中に合したる内觀は無限である。此小我と大我との内觀合一は、小我が大我の中に融込んで仕舞つて、また無限の大我の無辺の徳は此小我に全く融込で来る。其内觀は嘗に知見の智のみでなく、融合したる内感の妙味は言語の及ばざる処である。

釈尊が大宇宙に対する關係は他の哲学者科学者等が宇宙の実体若くは現象の万有を學說の材料とし研究の対象と見てをるのとは大に趣を異にしてをる。

科学者は自然法に対しては絶対に服従的である。仏陀は大自然の奥なる大我と自己とは一体と成てをる。大自然と云ても表面より見るやうでなく、絶対の大靈真如と云ひ、永遠に活ける靈としての如から顯はれたのが如来である。故に科学者の如く大自然の奴隸でなく、内面に靈の血脈が通つてをる、親子とも云ばまた一体とも云へる。内面の關係に於て哲学者や科学者とは異つてをる。

宇宙の大秘密藏の如く不思議なるはなし。宇宙は不思議の秘藏である。一切の自然の現象界は悉く秘密藏より発現したるものである。太陽の如き赫々と光を八方に及ぼし、地上の一切の生物の起伏生滅変化悉く宇宙秘密藏より顯現したるものである。一般の生物又人類に至つても自然の因果の因縁から生産れて居るけれども、大自然の内面の大靈に暖められて靈に復活せざるが故に、唯自然の奴隸と爲てをるに過ぎぬ。

大智慧態にして妙色相好身

仏教にて、心真如即ち実体の本質は、物心無礙、時間空間に超絶して、而も一切の時間と一切の空

間とに徧在せる、絶対永恒の万物内存の天心靈態とす。物心不二の故に天心靈態とす。万物の内に存す、故に内に非ず外にあらずして而も内外に徧在す。絶対の故に物心を統ぶる大靈態とす。

華嚴に総該万有心とは是なり、是即ち宗教語に謂ゆる如来法身の体、毘盧遮那である。密家に謂ゆる地水火風空大の物質、識大の心質とは本、六大無礙の本体之を金胎不二の大日と爲す。是斯教に謂ゆる弥陀の法体とす。是一切方法の本体にして一切生起の一大原因とす。

弥陀の法体は即ち真如絶対の天心靈態なり。然らば如来の妙色相好身はいかに現じ給ふやとなれば心靈態は色心不二の靈態にして、其体の上に相あり、相に色相と心相とあり。如来は宇宙全体絶対の大靈の故に、其相としては、一面より見れば宇宙全一の大智慧にして、智慧は例へば明鏡の如くにて鏡の明態には男女の色影が現ずるに、鏡は全体明体にして、而も全体色像を現ず。

有漏の衆生は物質の身色と無形の心とは無礙を得ざれども、如来の妙相は宇宙全体が即ち大智慧の鏡にて、また如として妙色莊嚴身の現ぜざる如なし。故に如来は色相を離れたる大智慧態として見るも、又妙色相好身と見るも一体の異方現に外ならず。

淨土の無比の莊嚴を現ずるも亦然り、能く此理を会得せざれば大乘の仏身を識ること能はず。

華嚴及び起信論等に此説散在す。深く領會すべし。

妙 法

つらく、惟れば天地万物の行はるゝ一切生物の生成する理法は実に不思議である。

日月星辰は天にかゝり地には一切生物が生存する。火は物を焼き水は潤ほし眼は視え耳は聴え意は分別する。一切万物の自然の理法即ち妙法である。此妙法の内性は即ち心である。此心から十法界また世界と衆生及び万物とも変現す。此心から因縁因果の理法として衆生を造り、六道の身と国土と、生死流転せしむ。之を衆生法と云ふ。

衆生の心に真理の光明を与へて無明を転じて光明とし、生死を出でて涅槃に入らしむる契機を仏法と云ふ。

此心に光明なければ即ち衆生と為り、衆生光明を得れば仏となる。心と衆生と仏とは本来無差別である。即妙法である。

四智の光

報身の智慧は心靈界を照す日光である。日光照せば山河大地一切物を明見する如く、如来の智慧光を被る時は、心靈界の無量の真理謂ゆる十界三千塵数の真理など顯現す。唯識に謂ゆる凡夫衆生の心は阿頼耶識を以て体とす故に闇夜の如く、日月の光にて万物を見聞するも同じ。人間は人間丈に万物を認識し、犬猫は犬猫丈に世界を感じて決していかに人類の美とし妙とする美術等に対しても彼等には何の価値もなし。人間は人間のアラヤ識（心）を以て世界をかやうな物と認めてをる。

唯識論には、衆生の阿頼耶識の転じて仏の大円鏡智等の大智慧と為る時は、恰も闇夜より日中に出し如く、心の世界は一転して夜明て万物炳然たる如く十方三世の真理瞭然として顯現し絶対なる如来の自境界も宛然と知見することができると。

唯識にては自己が阿頼耶識を転じて四智と成て成仏す。

今は我ら現在天性の阿頼耶の闇黒が如来の四大智慧の日光に依りて光明界の人と為るなり。たとひ

四智が明かに現はれざるとも、如来の光明には、復活する時に従来は唯人間自己本位に心をおき定めたるものが、転じて絶対なる光明、如来の四智の光明、照り給ふ中の人と更ることが得らる。夜明けて日中となる如くである。

三 徳 の 光

譬へば教育に知能開発の知識に対して徳器を成就する修身科ある如く、即ち智徳二育を要す如く、宗教にても如来は四智を以て人の靈性の知見の徳を開き、又一方には徳育の人格を充成する如く。如来は衆生の信仰に対して道徳心を養成する靈光を以て常恒に衆生に儼臨し給ふ。如来が四智を以て衆生の知見を明くするは恰も日光線の如く、信仰者の道徳心を養ふは化学線を以て植物等の果実を成熟せしむる如くである。稲実能く熟し良米を收穫するは太陽の力を俟ざるべからざる如く、我らが靈的人格の円満に完成し熟するは如来の光明による。

化学線の如く、人格を養成するは如来の神聖と正義と恩寵の三徳とす。

通じて仏教にて報身の三徳を法身、般若、解脱と云ふ。今は宗教故に神聖正義恩寵の三徳を以て如来の徳を顕す。

法身より分身出産したる我等が心靈を開発し煩惱と云ふ悪質を解脱して人格を靈妙態に成就せしむる如来の徳用あり、此三徳の光を以て報身の天尊は智慧と慈悲と威神の光明赫々として我らに嚴臨し給ふこと嚴父と慈母とが良家の子等に対する如きである。世に嚴父と慈母との欠けたる家庭に放縱に養成せられたる子は決して完全に徳性の成ることはできぬ。宗教心もまた然り。如来が神聖と正義との両眼炯々と視給ふ。即ち嚴父の如くに見られ、恩寵の愛々たる慈容を以て抱擁掬養する如きは即ち愛に富む母の如くである。

後

篇

礙へられぬ光のなかに住みながらしらぬは己がまよひなりけり

唯己が知見のいかが神聖の鏡に向ひ照り返へし見よ

正善の神の聖旨にかなはざる業は必ず亡ぶなりけり

邪惡を捨て、正善撰びとり国を建てます弥陀の本願

子を愛す恩寵の靈氣なかりせば靈の華はいかで開けん

安心と闇示

宗教心には安心あんしんの決定が最も大事であります。若し安心にして誤らんか万行徒らに施す、即ち功なきに至ります。されば宗教は靈的に活ける靈界の教師に就て教を請まねげざれば真実の信仰が靈的に復活することができぬ。夫れに安心の決定も大事である。

宗教の安心は催眠術の闇示と同じ。世のかよはかな安心は現在を靈的に活す功用がない。念仏すれば現世にはかわつたことなけれども死後に必らず浄土に生ずと、只念仏は未来往生の為であると。凭る安心を以ては迎も現在即今靈的に復活することはできぬ。例へば催眠術を施して術者が被術者に対して汝が病氣若くは性癖が今はとても治せぬけれども遠き将来には治るとの闇示を強く与へたならば迎も速座に病に効能はない。夫と同じくいかに熱心な信仰を以ても未来死後の往生の為めと云ふ安心の下には現在に心靈復活して靈的に活することはできぬ。世に善知識と云は信仰を以て心靈を治す良師を云ふ。自から靈に活る知識は自己の胸中に輝く如来の靈的生命が常恒に心中に活躍しつゝあり、故

に之を以て以心伝的に感應せしむ。其が為に人に安心を勉むるに、現在より如来は靈的に活すことを示す。

念仏は是衆生を靈に復活せしむる如来の靈力なり。衆生念仏すれば如来もまた衆生を憶念し給ふ。如来の靈力を被むるが故に我等の靈は活かさるゝなり。

我らは赤子である。赤子は親の慈悲の乳に依らざれば育たぬ。我らが靈は如来の靈乳に養はれて育つ。

宗教心の安心と云ふ心の安置^{すまひつかた}方に、現在から念仏して靈に活きんとの安心が大事である。靈に活きることなき安心を教ゆる教師は眞の活ける善知識に非ず。

家庭に於て子女を教育するに、此子は意気地なしであると何を為すにも必らず意気地なしと云て叱りて計りゐると、夫が其子女の精神に暗示となりて遂には意気地なしと化してしまふと云ふ。信仰も安心の据え置き方が暗示であるから、安心を未来の往生と暗示するは人を精神的に復活すべきことは得て望むべからずである。もし現在より心靈が復活せんと欲せば、如来の光明は靈を活すの靈力なり、一心に念仏すれば必らず靈的生命となり得らるゝ、との安心は必らず人の心靈を現実に活す力な

り。かくの如きの因縁を以て安心は闡示として人に死活の動機を与ふ故に頗る大事なりとす。

人格的の本尊

光明主義の本尊は永遠に活ける弥陀尊なり。理想最高の本尊は絶対的宇宙の中心最高処に蔽臨し給ふ独一不二の無上尊にして、一切諸仏方法を統攝し給ふ最尊者にして、一切万行の帰趣する処の靈体なり。如来は唯一不二にして而も一切の信者の為に各自の信仰に應じて靈応の身を分て其人の前に在ます、衆生の心想の中に住し給ふ。衆生の心相各々不同の故に感応する処の身色相好もまた不同。但帰する処は其人の信仰の本尊と為りて、一切の処一切の時に於て、其人の心意を開攝し指導し益々向上せしむる活ける本尊なり。

若し小乗教に於ては五分法身を各自の本尊とす。

釈尊御入滅に臨み給ひて、若我世に住すこと一劫すとも会ふものは亦当に離るべし。会ふて離れざること終に得べからず。自利々人の法皆具足せり、若我久しく住すとも更らに益する所なけん。応さ

に度すべき者は若は天上人間皆悉く已に度しぬ、未だ度せざる者には皆亦已に得度の因縁を作りぬ。自今已後我諸の弟子展転して之を行ぜば、則是如来の法身常に在して滅せざるなり。

如来の法身常住不滅の法身を之を、小乗教にては五分法身また波羅提木又と名づく。聞く所によれば、印度の小乗教にては得度式の作法に依りて五分法身を授け、そが其得度者の頭腦の中の本尊として、斯の戒体が発得して精神生活を支配するに至ると。

今大乘教にては教祖釈尊已に初めて正覚を成じ已るや、梵網戒三昧に入つて本仏盧舍那カシヤナを本身として千と百億との釈迦は各無数の眷属と共に本仏を圍繞して本仏より道德の根本たる戒法を聞くと。然れば即ち人仏釈尊の精神界には常に本仏盧舍那が道德律の本尊として常に嚴臨し給ふこと必せり。盧舍那仏即ち弥陀尊なり。已に信心獲得したる上にはナムアマミダ仏が実現し來たる。

ナムとは我等衆生の心の全心全幅を獻げて帰命信頼することなり。阿弥陀仏は我等が信念の前に大威神大智慧大慈悲を以て常恒に嚴臨し給ふ靈体なり。

ナムアマミダ仏と申す時、ナムの信念の前に弥陀世尊嚴臨し給ふ。

至誠心の念仏の前には弥陀現在し給ふ。なれども衆生の信心の鏡曇る故に現前せざるなり。導師曰

く、弥陀身心遍_ニ法界_一、映現_ニ衆生心_中。

宗 教 心

人は宇宙の中心なる独尊の实在を信じて真実に尊敬し信頼するときは自己の中心靈性が開發す。自己の靈性は自己の尊き性である。尊き性が開顯する故に大なる尊格を信認することが得らる。

自分の靈性尊き性を以て客体の尊き靈体が信じられる。大小異なれども其性質同き故に。見よ、動物の如き卑劣なる性を以ては大なる尊体を信認することはできぬ。其性質が異にして感応すべき理がない。鉞物の中金剛石の如き貴金屬にして始めて日光が反射する。瓦礫には日光反映せぬ。動物的の性には如来の靈体は反映せぬ。性格に於て異なるが故に。故に動物には未だ高等なる宗教心は顯動せぬ。人には如来光明を反映すべき靈的宝石の材宝を蔵して居る。然れども此宝石を琢磨するに非らざれば如来の光明反映せぬ。金剛石の如き堅固なる質の物は灰や砂を以て琢磨することはできぬ。夫と同じく人の最高等なる宗教心即ち弥陀の日光を反映すべき金剛の信心は迷信やまた野狐禪的やまた只

實質なき言語の説法を聞く位で發揮すべき靈性ではない。寶石を磨くには只金剛砂を用ゆる如く、人の靈的寶石を磨くには一心念仏三昧にあらざれば琢磨の功が顯はれぬ。

只念仏三昧即ち弥陀の靈力との最親密なる仏心衆生心との合致すべき三昧のみあつて靈性を磨くべし。若し靈性顯示する時は弥陀の日光反映す。此三昧に依つて磨かれ發揮する宗教心、此尊貴なる靈性に、弥陀の日光反映する時は是靈的人格、宗教界の偉人なり。眞実に活ける宗教家なり。只文字言語のみの僧侶居士などの窺ひ測るべき処にあらず。

人の靈性は、精神中の奥底に伏在す。金剛石は琢磨することは容易に非らず。其容易ならざる処にまた貴重なる価値あり。念仏三昧の至誠心あれば何人も成熟す。三昧の琢磨の功顯はれたる金剛石。常に弥陀の日光を映写する人の頭上には常に靈的光明反射しつゝあり。

觀音頂上の彌陀

念仏者の信心を代表する觀音の頭上に彌陀尊を安置す。善く琢磨せる光に弥陀の日光反映して其が

弥陀の靈に充さるゝ觀音の宗教心なり。頭上に弥陀を頂けるは是觀音の知見開示して弥陀を知見し弥陀の聖意に悟入せる態の表明なり。頭上に然る如く觀音の胸臆には、即ち内容的に於て弥陀と親密なる融合、入我々入、この神秘的の奥妙に於ては言語の及ばざる処。西藏仏教に異性相抱の絵画を以て神秘的感情の内容を表明す。即ち神人の靈的融合の心象を標現したるものなり。

觀音の胸に輝ける瓔珞

觀世音は金銀摩尼真珠るり寶石等あらゆる珍宝を以て瓔珞と為して相好円満の身を莊嚴す。是何の表明ぞや。是觀音は一切の菩薩の万徳を代表する靈的人格として我等弥陀法王を信念する人の人格を即ち品性を造るべきことを表はし給へり。諸の瓔珞の宝珠は人格莊嚴の万徳なれば是菩薩の願行を表はす。若し念仏して弥陀の光明に靈化して人格革新し弥陀の聖意を我意とし弥陀の聖徳を體現するに至れば是觀音の分身なり。たとひ完全なる觀音の万徳を體現するに至らざるも一分弥陀に靈化せらるれば一分の徳が備はりて一分の體現が得らる。

法喜禪悅

法喜は法悦とも云ふ。是は已に信仰の生活に入りし人の感情的の心理状態である。人は心靈開發する時は心機一変す。

未開の人の心は生理的の機制に閉塞せられて自然と不靈福の状態である。未開の心理は恰も開くべき花が未だ開けざる時の如くに、苦慮するの因もなきに苦慮し、恰も昧朦素朴の人が貴人に対する時は、俗に云ふハニカムと云ふ如くに、大なる如来の中に在りながら信心は開發せざるはこれ常人の自然なり。人は靈性具有すれ共開發顕動せざる間は、例へば金剛石の未だ琢磨せざる時の如くに不靈福の状態である。

若し人一度念仏三昧の功果として心靈が融化する時は心情の状態が平和に心寛くびろく体胖たふかに、狭き一室に閉塞せられたる人が広き天地に開かれたる如く、靈的気分が内に充ち如来大慈の光明の裡にある状態。恰も陽春和氣に花開き麗はしきを呈し馥郁として香を流すが如く、敏喜内に満ち靈感極まりな

し。此靈的気分を法悦と云ふ。常に平和にこの如来大慈光明裡に生息する心は歛天喜地常盤とよひの春永へに靈感極りなきを感ず。已に開發する時は心情が靈福態となりし人なれば、此心情を以て万物に待せば万物皆悦を以て我を迎へ、鳥歌ひ花舞ひ、同じ花月を眺むるにも自己の心の靈妙態と為りたれば、花も開く希有の色、月も真如の光を放ち、万境悉く靈象ならざるはなし。

若し爰に至つて釈尊が自己の靈的經驗より証明なされた經、例へば阿弥陀經に彼仏の国土には常に天樂てんらくを作す、黄金を地と為し、昼夜六時に曼荼羅華まんだらけを雨らす、等の文々句々悉く自己の靈が共鳴して浄土の樂地自己の心に実感し顯現す。故に自己の靈性活動し來つて浄土の經典を播く時は、經の文々句々、悉く活きたる浄土の莊嚴が自己心眼の前に實現し來りて、昔数千年前の説法は我眼前の靈境界となる。

亦人は例へば人の非常に歛樂を感ずべき境に臨んでも内心に悶ゆる時は歛樂を感ぜざる如き、經に謂ゆる昏朦閉塞して愚惑に覆はれ、悪氣窈冥にして妄に事を興すとは、是朦昧なる人の心理状態である。

經に、無量壽仏が七宝の講堂に於て大衆の為に法を宣べ給ふ時道教を宣べ妙法を宣暢し歛喜せざる

なし。心解得道し歎喜無量。即時に四方より自然に風起て普く宝樹を吹いて五音声を出し、無量の妙花を雨して風に随つて周徧す。自然の供養是の如く絶へず、一切の諸天皆天上百千華香万種伎楽を齎して其仏及び諸の菩薩声聞大衆に供養す、普ねく花香を散し、諸の音楽を奏し、前後に来往して更々相開避す、斯の時に當つて熾怡快樂勝へて言ふべからずと。

斯の如きの文字も若し能く自己の靈性開け来つて看る時は決して形容の詞にあらずして全く高等なる宗教心の実感すべき靈境なり。歎喜光が自己の心情中に融化する時は釈尊実験の説の如きは実に唯共鳴するの外は非らずして、自己の心靈に現前する機会ならざるはない。また唯弥陀心靈実験の談を以て自己の靈性の感鳴するのみに非ず、宇宙一切万有悉く如来の法身の顯現にして何かは法悦の感を動す機会ならざるはなし。

鄙にも都にも、例へば人が万物見る物聞く物として樂からざるはなしと云ふ樂しみ、人間の造りたる大都會の中に演出する快樂も、またすべて都會の誤樂は多くは人工的である。廓大なる建物の中に眼を眩暈し身を悦ばしむるものを以て人に歎樂を与ふ。然るに田舎山村僻邑の地に至れば山に水に自然の美天然の風致また人工の及ばざる趣味あり此中に亦自然の樂あり。然るが如く浄土の一切五妙境

界の美観は仏智所成の顕現にして其美微妙奇麗なる亦言思に絶したり。然れども娑婆の自然の風致は是法身の顕現にして、一切万物の中に自然の美をなし風趣を供ふなり。是恰も田舎の如く若し夫れ自己の心靈開發し弥陀の靈に醒むる時は、娑婆は娑婆としての法悦を感じべき万境なり、浄土は浄土として五妙境界の微妙莊嚴ならざるなし。これらはすべて法悦の状態とす。

禅悦は三昧樂とも云ふ。心静なる定中に深く内的靈感の感情に於て感ずる心状。定中の微妙なる喜樂を感じ、之を禅悦といふ。

こ　　才　　ヤ

宗教心即ち信仰を立てんには先づ第一に私共を撰取て救ひ下さる所の大慈父、即ち一りの大ミオヤの实在を信じて之に帰命信賴する処に宗教心は成立つものである。一切の衆生を悉く我子としてすべてを平等の慈悲を以て無条件に撰取て救ひ下さる処の大ミオヤの在ますことを信するのである。

我等が教祖釈迦牟尼が此世に出ましたのも、若し宗教的に云はば、宇宙に唯一の大ミオヤの实在を

教へて、すべての衆生をしてミオヤの聖意に隨はしめて、其御子たる自己であることを信じて、ミオヤの全きが如くに全き人に為さんが為に教へを垂れ給ふたのである。

されば釈尊はたとひ人類と同じく人の身を以て此世に出で給ひしかども、其御心霊の本体は法身常住の無量寿如来に在します。故に法華經に釈尊は御自分の御本体は宇宙の大ミオヤに在ます故にかやうに仰せられてござる、「三界は我有にて其中に衆生は悉皆な我子である」と。三界とは欲界、色界、無色界、云換ふれば地界と天界と空界とにて即ち宇宙全体を指したものに於て此中の生として活けるものは悉く皆吾子であると仰せなされた。

仏教は一面は哲學的にて一方よりは宗教的である。

一の大ミオヤを、哲學としては真如とか又法性とか第一義諦などの種々の名を以て号けてをるけれども、宗教としては宇宙全体を真に活ける尊きものと信ずるが故に、法身とかまた如来と云ふ名を以て大ミオヤを表明してをる。我等が真実に活ける宗教心を以て観るときは宇宙に最も尊き唯一の大ミオヤの實在を信ぜざるを得ぬ。唯一の大ミオヤに在ますけれども如来は三身に分れて在ます。ミオヤの三身の義を讀者は能く會解し給へ。三身とは一に法身、二に報身、三に応身であります。

法身とは毘盧遮那、即ち徧一切処と稱へて宇宙全体を普く一の活ける如来としてビルシヤナ如来と号けます。同じく法身と云ふも哲學的の教では法身とは只理法身、智法身杯と云て宇宙に存在する処の理法であると説てをる。宗教的に法身を教へてをるのは真言のビルシヤナは宇宙全体の地水火風空の物質の方面は是ビルシヤナの身体なので、宇宙に徧満する心を識大と申し、物質と心質とを合してビルシヤナで、即ち宇宙全体をソツクリ此まゝ活ける法身仏と仰いでをるのである。

法身仏は何処に在ますと云はゞ宇宙全体を其まゝ法身と号けたのである。

楞嚴經には、如来藏妙真如の性とは是天地万物の本体なので、一切の物質も、また人の眼の見ゆる耳の聴ゆるを始としてすべての人の心の作用も、また外の色も声も香も味も其本は宇宙全一の真如の性の作用である。之を宗教的に云はば法身の大ミオヤと名づく。して見れば私共の此形骸も心も大本はみな法身から受けたる物である。故に法身は天地万物の大ミオヤに在ます。

報身としては私共衆生の心を智慧と慈悲の光明を以て摂取靈化し給ふミオヤである。報身を盧遮那如来と稱して、訳すれば淨満また光明遍照と云ふ。即ち、アミダ如来が智慧と慈悲との光明を以て衆生の心霊を開きて清き善き人と為らしめて下さるミオヤである。

宗教の客体としてはこの報身光明遍照の如来が最も大事なので、此のミオヤの光明を被むりて私共が法身より受けたる心、心は喩へば鶏の卵の如くにて、之を仏性と云ふ。人々仏性の卵は有て居るけれども卵をあたゝめて孵化するやうに、私共の心を報身如来は光明の中に撰めて麗はしき信仰心を復活させて下さるのが報身仏と申します。經に無量寿如来の威神光明最尊第一にして諸仏の光明も及ぶこと能はずとして一切諸仏の本仏として尊き処の如来である。此如来に無量光等の十二の光明の名が在して、此光明こそ一切衆生を救ひて全き人として下さる御働きを有つて在ますのである。

応身としては報身なる浄界より身を分けて此世界の人類に応同して人間の身を以て衆生教化の爲めに此世に出給ひし教祖釈尊を応身と申します。たとひ報身如来なる光明遍照の尊き如来は太陽の光明の如くに衆生の心を照し給ふ如来在ますとも、若し応身の釈迦如来として世に御出ましくは衆生は教はることが出来ぬ。

故に法身としては天地万物の大ミオヤにて私共の体と心とのすべての大本なので、報身としては私共の法身から受けたる靈性の心をたすけて御子の徳を顕はして下さる御働きのミオヤにて、応身として教祖釈尊、即報身如来の光明に救はるゝ様に教の爲に此世に出ましたのである。故に此三身一つ欠

くも私共はたすからぬのであります。故に一の大ミオヤなれども三つに分つと、法身を本の大ミオヤとし報身を光明摂化のミオヤにて応身の釈尊は教へのミオヤであります。此の三身は本一体の大ミオヤであります。

法身の實在につきては若し哲学的に云ば、天地万物の大は天体の星宿の循環の秩序整然たるを見るもまた万物に条理あり秩序あるを見るも、此万物の天則秩序の統一的存在なくてはならぬ。万物の法則の本体を宗教的に云はゞ大ミオヤとす。

また報身は信仰する人の心を靈化する働きを有て在ます。摂取光明の如来の在ますことは、釈迦如来を始め古今の宗教界の偉人らの精神の、宗教的信念の最も聖き尊とき光明を放つ如きの心を成じたるは、宇宙には信仰する人の心を靈化する神尊の實在者が存在するが故なり。

例へば太陽の光に稲の実を成熟せしむる働きが存することは、目には見へねども全く太陽の光熱によつて稲米の果は成熟するものである如く、如来の光明は人の精神を聖靈的に成熟せしむる働きを有てをる。故に古今の宗教的偉人等は皆光明如来の光明を被むりて聖き信仰心が成熟なされたのである。故に大ミオオの光明、人の精神を靈化し給ふ力の存在することは、古今の偉人の心に結びたる果

を以て証することができる。

実は宗教は理論よりは実地である。何人も至誠専心に如来を憶念する時は必らず自己の精神が如来の光明に靈化せられて生れ更つて実に光明赫々たる心の生活することが得られる。是実は自己の精神に於て証明すること確かである。

仏子の自覺

仏教では一切衆生悉有仏性とて何人にも仏性と云ふ最も聖なる如来の御子たる性を具てをる。故に我共は仏の子たると共に人の子である。人間には両性を具してをる。人の子としては有ゆる肉欲我欲の闇黒方面を有てをる。人は動物である故に動物的の欲を持って動物欲を恣にせんとする欲を持つてをる。他の動物のやうに本能的に犬は犬、馬は馬の本能のやうに質直ならばまだしも、人間は智慧が発達しておる故に智慧までも悪用して動物欲の眼の欲耳の欲また色食の慾を逞うせんとしたならば実に狡猾なる最も悪き動物である。然れども人には奥底に伏能しておる靈性と云ふ本来仏の御子たる靈的

性能を具しておる。之を開発してそれが働けるやうになれば人は最も靈的に最も麗はしく最も清き精神生活を為し得らるゝなり。

仏教の宗とする処は人々本具の仏性を開きてミオヤの光明の中にミオヤの聖意に契ふ人として真に価値ある意義ある生活に入らしめんが為めに仏は世に出給ひしなり。

人は人の子たると共に如来の御子であることの自覚に入らしめんが為めに、仏は世に教を垂れ給ふた。法華経に、一切衆生は悉く我子と仰せられ、また方便品に、諸仏如来は衆生をして仏の知見を開示して仏の正道に悟入せしめんが為めに出世し給ふと。意は人々本具の仏性を開きて仏の御子の徳を示さんが為にと。

また梵網経には人々が仏の御子であることを自覚せしめんが為めに大乘戒を授く、衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る位大覚に同じおぼはぬれば真に是れ諸仏の子なりと。意は自己に仏の性あることを正しく自覚した時が真に諸仏の聖子の自覚である。

若し唯人間は人間の子たるのみにして仏の御子の性徳を具有せぬものなれば、仏の教化を受けて如来の光明に攝取せられて光明中の生活に入ることができぬ。故にそこが大乘教の有りがたき処、何人

も皆仏の御子なれば如来の光明に摂化せられ仏性開發して我は是仏子なりとの自覚がされる。また人間の子である本能も靈化する。こう成つて見れば、人間の本能の欲も、靈性の光りに照らされてよく自己を改造し鍛練する時は本能も純化する時は高等なる人間としての働を為す。

人間の精神の奥底には無尽の性徳を具有してをる。何人も自分で自分の奥を究め底をたゞきて完全に發展させることは容易でない。人の奥に有する靈性は無尽蔵を有して之を發展すべき機会を得て開發する。

先に大ミオヤに三身在ますと宣べた。然れば私共衆生は法身から受けたる靈性を有つてをるけれども、即ち先に云た如く仏性は具有^{もつ}てをるも鶏の卵の如く之を孵化して鶏とならざれば鶏として活用ができぬ。吾人が御子の自覚をせんには必らず大ミオヤの光明に摂化せられねばならぬ。是宗教の必要ある所以である。然らばいかにせば私共の麗しき心は卵の孵化するやうに靈き心が開發するとなれば、即ち一心にミオヤの聖名を称へて恩寵の光明に摂化せられんことを要す。之を經に、ミオヤの光明は普く十方一切を照し給ふも唯念仏の衆生を光明の中に攝取して捨て給はずと。専らミオヤの聖名を口に称へ、意に専らミオヤを憶念して、不斷に絶ざれば、如来の大慈悲の光に融化せられて漸々に

信仰心が熟して、喩へば卵の中味が雛の形つくりてつゝに開裂して雛と為る如くに、心靈が喚起し来れば我は是れの御子なりとの自覚が感じえらる。

読者諸君よ、誠に／＼に御勧め申します。君の奥底に伏する靈性が何とか機会を得て覺醒して活んとして蠕めいてをるではないか。然るをあなたが唯肉の我見と我慢などの為めに欺かれて、闇黒の中に押込られてをって、光明赫々として開裂しきれんのは実に可惜ではないか。我は人の子たると共に大ミオヤの子であるといふ自覚の光を以て人の子たる自己の本能を醇化し、宇宙広大なる中に立つて大ミオヤの子なりと叫び給へ。

若し一りの大ミオヤの御子との自覚できれば、一切の人類は悉く真の同胞なりとの信仰が立ちます。

只一国民のみに限らず、一切の人類は悉く一の大ミオヤの御子なればすべては同胞である。人の子としての我は兄弟三人か五人。若し我は大ミオヤの御子なりとの自覚の下には、四海兄弟のみならず一切人類は全く仏の血の通ふ同胞にて、相互に仏心を以て相向ひ相愛し合ふことが出来る。

真に愛する我らが同胞よ、疾く君の奥底に潜める靈性の覺醒して、我大ミオヤよ、我らが靈き同胞

衆よと、心の底から此声の発する日の一日も疾く来らんことを祈ります。

二四〇

光 明

ミオヤの光明とは如何なる相すがたにてまた何なる働きをもつて居るものぞとの間に対して、光明は仏教にて色光しきくわう、心光の二種に分てあります。大ミオヤには両方の光明有り。色光とは即ち太陽の光の如く肉眼にて見へる光にて、心光とは心理を照らす光なのである。

両面に亘つてをるけれども、今正しく私共が被むる処の如来の光明は精神の方面に受る処なれば、ミオヤの光明には悉しくは十二通りに名を命じ其光明の徳が十二通り明かに分て最も確實に私共の精神を照す光明在ますけれども、今は略してミオヤの光明を太陽の光に比較して我らが心を照らす光明の真理を説明します。太陽に光熱化の三線に比例して、如来に智慧と慈悲と威神との三光あり。ミオヤの智慧光は太陽の光線に比すべく、日出づれば世間が普く明るくなるは光線の力に依る、山河大地一切の植物等が歴然として現はる。ミオヤの智慧光は人の精神の知力を照らす処の光明なれば、人々

信仰に入て如来の光、智慧光の下に入れば、たとひ迷ひの凡夫とは申しながらも、道理に明るく、愚痴が出ず、物に明らめがつき、また因果の理を信知し、また如来の实在を信じ、今世後世の事に確信して疑はず、尙進んでは仏知見を開きて如来の一切の真理をも信じて疑はざるに至る。

次に太陽の熱線に比すべきは如来の慈悲である。慈悲と云ふものは心の最も暖温なるものにて、他の苦悶にあたるに同情し他人の苦を抜き樂を与へんとの同情である。世に慈悲も同情もなき人の心を冷酷と云ふ。然るに世にミオヤの慈悲ほど一切の人類に対して暖かなるものはない。私共一切衆生の為に無限の同情を以て苦を抜き樂を与へるのは即ちミオヤの慈悲である。されば春和の暖温なる氣候を被むれば桃李の花咲く如く、如来の慈悲の光明を被むれば信心の花開きて春風駘蕩えも言はれぬ樂しき心の花の開きたる生活のできるは、如来の熱線を被むつた故である。斯の如く人の精神に歓喜と妙樂と平和とのあたゝかなる慈悲を以て衆生の心に与へ給ふ故に如来の慈悲は太陽の熱線に比すのである。

ミオヤの威神は太陽の化学線に比す。太陽には化学線がありて化学作用を起して、例へば作物に肥料を施こすと、たとひ其肥料が土中に在るとも太陽の光の化学線にて肥料が分化して、土中にありて

夫を植物が食物として、夫で植物は益々培養せられて成長す。すべて日光に合ふて変化を起すは化学線
線
の
功
能
で
あ
る。

ミオヤの威神力で人の精神の意志の悪質煩惱でも光明に浴すれば変化す。恰も柿の果の渋をも日光
に乾燥する時は渋が甘干と成りて渋の深き程還つて甘味を作すが如く、人には何なる者にも煩惱の渋
のなきはない。(貪瞋嫉忌憎忌愚痴等のすべての弱点を煩惱と云ふ。)人は煩惱の爲めに自ら煩悶し憂
怖し苦惱す。而して他人にも忌嫌せらる。自ら苦しみ他に嫌はるゝ煩惱は何人も有てをる。されども
此煩惱あればこそミオヤの御慈悲が有がたく感じらるゝなり。されば決して我は煩惱深しと悲しむ
勿れ、自暴自棄する勿れ、其の煩惱の渋があればとて、如来の光明に依つて靈化せられて渋が變じて
甘乾しと爲るが如く、人の心は信仰に依つて一変する人格は一転する。諺に悪にも強きは善にも強き
とは宗教に入りたる人に於ても多く見るべきである。

或る男子は非常に疴癩持にて毎日二三回位はをこらぬ日はない、家族も是にて大に恐れて居つた。
然るに一度ミオヤの光明に触れて心機一転して半年を経れども未だ一回も患を起したることなきを家
族の者は大に悦びて語り。また或婦人は非常にヒステリーの為に常に自ら悶えて悩むのみにあらで

主人も大に困じて居りしに、然るに一たび信仰に入て其性質一転して実に生れ更りし人となれり。ミ
オヤの光明に触れて人格を変化せしむること恰も太陽の化学線の如し。是で太陽の三線に比してミオ
ヤの光明の徳を明せり。

ミオヤの光明の存在につきては、実には理論よりは、人々自ら一心に念仏して自ら光明に触るゝ時
は、冷暖自知、自ら実験の上に信ぜざるを得ざるに至るのである。

經に、其れ衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歆喜踴躍して善心生ず、と。

全くミオヤの光明は之に触るゝ者をして人格を一変せしむ。

諸君よ、ミオヤの光明は実に天地に充滿し、外に計りでなくあなたの身の中にも充塞して居る。あ
なたが至心に念仏する時は必らずあなたの精神中に活躍せん。

光明の要ある人

すべての人類は太陽の光が無くては叶はぬ生物である。太陽なくては活きることが叶はぬ。いかに

眼が有ても太陽なくては物を視ることができぬ。夫と同じく我ら心霊に活きんと欲するならば是非ともミオヤの光明に由らなくてはならぬ者である。我らは現に闇黒である。何れより人に生れ来り、死して何に趣向するのか自ら明かに分からぬ。闇から闇に迷ふ凡夫である。ミオヤの光を仰ぎて初めて我らは光明の生活に入ることが出来る。

光明にふれよ

我等すべての活とし活ける者の一の大ミオヤ在ります。真のミオヤの聖意を私はすべての同胞の衆に御知らせ申したい。世の中に親なき子程みじめ惨な物はない。私共の此形体が生々して人並の身と成つて今日の開けたる世に処することできるのも、此形に就かば全く親の恵であります。其れの如くに私共の心の中心に在る心霊の大ミオヤは如来さまであります。されば釈尊は仏は是世を救ひ給ふ慈悲の父なりと念へと仰せなされた。私共は心霊を救ひ給ふ慈悲の父を離れては清き人と為ることはできません。私共が只此肉体にのみ活きて靈に活きることできねば狡猾な動物に過ぎませぬ。

如來の慈悲の乳を飲んで信仰に生きて見給へよ。眞実に心寛く体胖かに限りなき有難さと平和との日暮しができます。

世の人々は是程確かなミオヤの實在を自ら信ずる心の起らぬのは何故であらう。大ミオヤの恩寵の光は眼には見へぬけれども自己の靈性即ち信仰心さへできれば疑がふことができぬ。然らばいかにせば大ミオヤを信ずるやうに成られませうとならば、そこを私は眞から貴下に御聞せ申たいのです。どなたでも如來の實在を始めは只道理の上で計り聞て而して眞実に信仰の實が得らるゝと思ひますが、實は夫は大なる誤であります。

清き情操

一大事の安心につきては先第一に宇宙に唯一のミオヤの外に全幅を獻げて壽命信賴すべき御方は無きことを決心す。實に唯一の大ミオヤの外に我を接受して諸仏同体の仏位と爲し給はる御方は在まされぬ。

安心と云ふ信仰の決心が大事です。

あなたには此安心の情操が立ちますか。

如来よアナタの外に私を授受して御救済下さる御方は決して在まさぬ、故に私は生命を献げてアナタに帰命信頼申上ます。已にアナタに献げた命のことなれば縦令生命にかゝはる事情が起らうとも決して他の神や仏に祈誓する様な事はいたしません。

アナタの外に私の命を献ぐる御方は在りません。アナタの外に私の魂を献ぐる方は在りませぬ。アナタの外に胸の底を明して御頼申す御方は在りませぬと云ふいかなる事情の為にも決して動かぬ信の情操こそ、実に清き心なり。

永遠に活ける心霊は已に如来と結婚したのである。貞婦両夫に見えず、いかなる事情の下にもいかなる誘惑にも決して此靈的貞操を破損する事はない。また宇宙唯一の君を措きて他に意をよせる要はない。

或深窓の下に育ちし窈窕たる淑女があつた。安心の堅固なる信仰の貞操実に其操の清きこと比ぶるものなし。重患に罹つて医薬悉く尽せども効なく已に危篤に瀕す。時に法華の験者あり。之を聞いて

大に悦び、即ち往て其の父母に勸むるに娘の為に法華を信ぜよ忽ちに平癒すべしと。父母大に悦び之を女に告ぐ。女曰くあゝ我父母よ、是の如きの大事に臨んで今尙惑ひ給ふか。若し我如来の慈悲の御手を離れて法華に帰せば神識永く闇黒に墮せん。我生命は即ち如来の有たり。此土に在るも浄土に生るゝも如来の聖意による。若し法華を信じて天死てんじなきやを識らんと欲せば、法華宗の墓地に早世天死なきや否やを検し給へ。心霊を救ふ妙法を唯糊口の糧と為す。憎しと云ふよりは寧ろ憐むべき徒なり。即ち今幸にして如来に自己をさゝぐ。

オ、如来我を試み給ふか。アナタを措きて私何をか頼たのまん。私は益アナタを慕ふ。私は此土に在るも浄土に在るも永遠不死の生命なれば、此外に生命を云々する信心の要あるをしらず。ア、如来よ、慈悲のミオヤよ、アナタは法華僧を使はして私を試み給ふ。我が金剛の信心は決して法華僧の瓦を以て割ることは出来ぬと。

ア、清き操よ、此操こそ永遠に如来と離れざる結婚なり。

靈は已に如来と結婚式を挙げた。アナタと永遠に離れることのなき仲と為つた。此れに就いて思當るのは、タゴールの闇室の王の説に、私は王妃と為つて已に久しいけれども、未だ一度も配偶者たる

王の姿を親しく見たことはない。王様は全体美しい御方か、醜い御方か。どうも親面した事がないから自から分らないと。今私も昔はタゴールのと同じ様な経歴をたどつた経験がある。如来と割なき仲と為つては居るものゝ、親しく慈悲の面に接せざりし程は、朦朧と雲井はるかに憧憬るゝものゝ、その間にまた雲のかかるありて何時かこの雲を去りてさやけき月を見ま欲しさ。

昔慧心院僧都そんづの実験より現された雲中の弥陀の聖影瞻仰するにも、僧都の親観せしその如くに我もまた面見の日のあれかしと逢坂あふざの関のゆるされぬことを憾あはみし、宇宙に充滿する程のアナタの無限に広き聖胸の程を、淺ましき我身の悲しさ折々は雲井遙かにアナタの嘆息をして、聖者善導または聖者源信等の賢士なればこそ、月下らず水上らずして感應道交して寝る夜の床にも靈界の美人は通ひなされて離れぬる隙はなしと物されしよ。私ごときを卑みて聖意をかけまさぬかや情なや。かゝる片おもひ何ぞ我をば嫌ひ忌み給ふぞと、己が業障の深重なるを忘れ、還つてアナタをお憾み申したることもありき。

念佛三昧のこゝろの風

世の同胞衆よ。念仏三昧の行は三世の諸仏も悉くこの妙行に依つて正覺を成じなされたほどの最も尊い行法であります。此尊き妙行を修する時の神の置所を能く心得てお勤めなさるようにお勧め申します。

何事でも其妙所に達せんとするには先づ神の入れ方が肝心であります真の神の投込ざる念仏では心靈に活かることが出来ませぬ。

然らばいかにせば念仏に神を入れることができるであろうとお問ひなさるのでしよう。今愚納は念仏三昧の神の入れ方について話さうと思ふのであります。

南無と言ふことは自己の全心全幅を阿弥陀仏に投歸没入してしまふことであります。然らばどう云ふ風に投げ込んでしまふのであろう。阿弥陀仏のまします所さへどの方にましますかはしかと分りもせぬものを、その如来の中にいかにして自己の神を投げ込めましようと思ふでしようが、なるほど初

めは如来はどこにましますか、しかと分らぬ如来の中に投げ込みやうは無いと思ふのは何人も然か思ふのでありませう。けれども如来は絶対的に尊とく在まして何の処にも在まさざることなき靈体なれば、唯無上の尊敬心を以て、アナタは今現に真正面に在ますものと信じて、靈名を呼び奉れば大ミオヤの大慈悲の靈胸に響きて慈悲の眸を注ぎて我を見そなはし給ふと思ひたまへ。

又大悲のミオヤをお慕ひ申して一心に念じ奉るべきのであります。夫でも初めはいかに聖名を呼びて念じ奉るも、其心の向ふは唯真闇にて如来の實在すとも思はれぬ程なれども、そは自己の業障が深重なるが故に業障の為に心神が闇いから心の向ふ所が闇いのであります。

けれども只一心に念仏して慈悲の御名を称へて至心不断なる時は、漸々に如来の慈光に育まれて心神が発達する故に神の入れ方が自づと分つて来る程に真面目に修しなされませ。

聖名を称ふる時の心の投込み方を法然上人は道詠にてお洩しなされた。「あみだ仏と心を西にうつせみのもぬけはてたる声ぞ涼しき」と。是があみだ仏と神を弥陀の光明中に投込みたるしやうにて、骸は蟬のもぬけ殻のやうに知らず／＼無我無想と為る。

さうなれば身は娑婆に在りながら神は弥陀の中に逍遙するやうになるのであります。

夫でも又思ひなざるのでせう。生れて以来まだ一度も瞻まがんだ事の無い如来をどうして想はれませうと。けれども確と見えねども、如来は実に在ますものであるから、唯仏陀の教を信じて現に在ますことを信じて念仏し給へ。一心に念ずる真正面に在ます如来は、あなたの念ずる心を一々に受けなされて在ます事があなたの心に響いて来る程に。

然しながら口に阿弥陀仏と云ひながら心は自己の胸中に在りて種々の雑念や様々の妄想に駆られて神が其中に紛らされてしまふて、口ばかりは御名であるが神は如来と一つに為つてをらぬと、それは真の念仏三昧でありませぬ。

念仏三昧の心は正に如来の光明中に風のまにまに風の如くに飛び騰たかるべきであります。

か様な話がある。英国のロンドンに或会社員の中に紛擾まごが起つた時に或名士の信仰談にて衆多の社員社員の紛擾が解けたとのことである。其大意はかうである。天に在ます神は肉眼では見へぬ。其眼に視へぬ神の実に在ますや否やをいかにして分るかと諸君は疑ふのでありませう。然し眼に視へぬ神なれども至誠心に祈る時は、其心が確りと神様に貫徹して神意に触る故に其が祈る人の心に確りと神の御答が感じられます。至誠心なき祈は神様の聖旨に貫徹せぬ故に響がありません。今喩を以て語らば諸君

の御存知の如く此ロンドンは非常な濃厚な瓦斯気が折々かゝると夫にまた煙突の煙の甚しいので少しも天が見へませぬ。夫にも拘らず季節になれば風を揚て楽しんで居るものが沢山あります。煙や瓦斯気の為に風は見えぬけれども今日は風が能く揚つたと云つて悦んでをるではありませんか。風が騰つたか落ちたか見えぬのに何にして善く騰つてをることが判ると尋ねるならば答に曰ふのでせう。君よ、風は見えねども善く騰つた時は其緒に確かと答がある。若し風が墜落して了へば緒に答がない。との譬にて、至誠の祈は神に徹通して神の容るゝ処となるとの理を説いて衆人の紛擾を解いたとのことであります。

今念仏心も夫れと同じく、至誠心の念仏は一心に神の風が高く弥比の中に騰るので、称名の風のまに／＼空高く騰る。大念は大仏に小念は小仏に一心の全部を悉く弥陀の中に没入して風緒のあらん限りを尽して能く騰る時は、胸の箆の中に残るべき余緒がない。一心不乱に弥陀に没頭して了つ時の心の緒は夫を曳て見ても堅く一杯に昂つてをる。

諸彦よ、一心に念仏する時神の緒の有らん限りを弥陀の中に投入して了へば我胸中は妄想雑念の緒がなくなつて自分にもぬけ殻と為つて、神はみ空高く弥陀の中に騰つて居ります。其時は無我の状態

となります。念仏三昧のナムアマミダ仏の風に随つて神の風が力一杯に騰つた心の状態を聖善導は「神を騰て踊躍して西方に入る」と讃してあります如くに、三昧中に歓喜踊躍して神は浄土に逍遙する相となるのであります。

全く能く念仏三昧を修した方ならば其時の神の在る処が能く判ります。業障の瓦斯や煩惱障の煙にて自己の神が弥陀の中に合致した事は視えねども深く三昧に入て神が弥陀に合したる時は、胸に何とも言はれぬ靈感の答がある。若し神が弥陀の中に騰らずして地に落ちたならば、折角の念仏中に只娑婆の雑念の為に紛はされて、貴重な時間と精力とを空しく費してしまふのは実に遺憾な次第ではありませぬか。神の風が能く騰らず胸の箴の中に緒の残りある故に種々の心緒が現はれて様々の妄念雑念と為るのであります。心の在らん限り一杯に騰つて心の緒が残りあらずば妄想雑念は自づから薄らいで来る。而して神の眼も漸々に開けて広い／＼大光明中即ち如来の中に在るやうになります。

諸君よ、念仏する時は神を一直線に高く／＼み天さやかなる弥陀の中に投込んでしまふことを能く修習し給へ。称名の風に神の風は歓喜踊躍しながら飛び騰りて弥陀の中に入神してしまふ時は、心の箴の中に心の緒を残さず妄念の跡を払つて、三昧に入る時は身はこゝに在りながら神は浄土の人とな

るのであります。

いや高く心の風はあがるなり御名よぶ声の風のまに／＼
月を見て月に心のすむときは月こそおのが姿なるらめ

辨栄聖者
光明大系

無礙光

終

目次

無礙光前篇

教友にまで申す.....	七
人生の帰趣.....	一三
安心.....	一八
所 歸.....	一九
自己は無智無力唯罪惡のみと知る.....	二〇
歸命すべき独尊を宗教意識に安置す.....	二一
本 尊.....	二二

心常に本尊を安置して……………	二四
所 求……………	二六
去 行……………	二八
慈悲の御親……………	三〇
威神光明最尊第一……………	三七
如来性世界性衆生性……………	三九
靈に活きる念仏……………	四八
念仏三昧に明鏡を磨せよ……………	五〇
心 本 尊……………	五一
恭敬と愛慕……………	五二
光は心靈を愛育し給ふ力……………	五三
念 仏……………	五四
火と炭との喩……………	五九

如何にせば慈悲の火が燃えつくぞ	六一
光明の増上縁	六三
如来は大智慧態にして又妙色相好身	六五
ミオヤの聖意	六七
光明の靈化	六九
靈性の解化	七〇
婦命	七一
念	七五
動揺せざる安心	七六
光明獲得の念仏三昧	八一
三昧に入れ	八三
三昧の練習	八五
自己の人格を無視する勿れ	八六

南無の二義（救我と度我）……………八九

本 篇

無礙光……………	一一〇
如来の三徳……………	一一一
神聖……………	一一一
正義……………	一一六
恩寵……………	一一九
仏陀の三徳……………	一二四
神聖正義恩寵……………	一二四
道徳の本源……………	一二七
恩寵の体現……………	一三〇
無礙光は解脱の徳……………	一三二

宇宙 大道	一三三
世界性と人性とは自ら解脱する能はず	一三四
無礙光によりて解脱	一三七
客觀的正義（社会制度及び選択本願力）	一三八
自然界に現はるゝ選択正義	一三九
世界に行はるゝ選択本願の正義	一四〇
現世界は方便土	一四二
神聖は道德の一大原則	一四三
形式と目的	一四五
自律と他律	一四六
主觀的正義（本務の形而上根底）	一四八
恩 寵	一五一
恩寵に方便と目的の二方面	一五二

終局目的としての恩寵……………	一五四
衆生はいかにして解脱を得べきぞ……………	一五五
恩寵の三種（三縁慈）……………	一五六
無縁慈……………	一五六
法縁慈……………	一五八
衆生縁慈……………	一六〇
三徳の連絡……………	一六一
無礙光は道徳的光明……………	一六四
無礙光は解脱の徳……………	一六五
無上菩提（無礙光）……………	一六六
無礙光に消極と積極……………	一六八
神聖同化の勢力……………	一六八
無上菩提の性能……………	一六九

婦趣せしむる性能	一七二
無上權威の神聖態	一七四
内面的正義	一七五
選択本願力	一七八
正知見と正義	一八〇
法界等流の恩寵	一八四
法藏菩薩の大願	一八七
本願力即ち神的エネルギー	一八八
光明の体相	一九二
三徳と菩提心	一九六
靈徳不思議の力	一九八
恩寵發得	二〇〇
恩寵發得の二縁	二〇五

現在我と理想我	二〇九
歸命と融合	二一〇
入我我入	二一〇
宇宙の本体	二二二
大智慧態にして妙色相好身	二二三
妙法	二二五
四智の光	二二六
三徳の光	二二七
後 篇	
安心と開示	二二一
人格的の本尊	二二三
宗教心	二二五

彌音の瓔珞	二二七
法喜禪悦	二二八
ミ オ ヤ	二三一
仏子の自覚	二三六
光 明	二四〇
光明の要ある人	二四三
光明にふれよ	二四四
清き情操	二四五
念仏三昧のこころの扉	二四九
目 次	二五五